

野草雜記・野鳥雜記

野草雜記

柳田國男

青空文庫

記念の言葉

この二冊の小さな本のように、最初思つた通りに出来あがらなかった書物も少ない。私は昭和二年の秋、この喜多見きたみの山野のくぬぎ原に、僅かな庭をもつ書斎を建てて、ここを一茶いつさのいうついの住みかにしようという氣になった。あたりはまだ一面の芒尾花すすきおばなで、東西南北には各々二三本の大きな松が見え、風のない日には小鳥の声がある。身の老い心の鎮まつて行くとともに、久しく憶い出さなかつた少年の日が蘇よみがえつて来る。私の生れ在所も村であつたが、家が街道端でこの辺よりは立て込んでいたために、山に入らぬと色々の鳥は見られない。里にいるのは無数の雀すずめばかり、鳶とびと鳥からすの他には空を横ぎるものがなかつた。雁がんも水雞くいなも時ほととぎす鳥も、すべて歌俳諧と版画とによつて知つたのである。これに反して野の草には友だちが多かつた。それがこの岡のまわりにも群を成してはいるのだが、幼ない頃に見たのとはどうも様子が少し違う。ということが一段と昔を偲しのばしめたのである。たとえば「雀の毛槍」などは、私等が抽ぬいて弄もてあそんだのは、もつと莖が長々として花の総ふさ

が大きく、絵にある行列のお供の槍とよく似ていた。母子草ははこぐさもこちらののは、餅もちに入れるほどにもふつくりと伸びず、小さなうちにもう花が咲いてしまうのは風土のためであろう。すみればかりは関東の野の方が種類も多く、色もずっと鮮あざやかなように思われるが、蒲公英たんぽぽもまた紫雲英げんげも、花がやや少なくなかつ色が淋さびしい。ただその埋め合せに野木瓜のぼけとか山吹とか、故郷で覚えていないさまざまの花が、この野の春色を豊かにしているのである。昭和三年の初めての春は楽しかった。もしも幸いにこの家に十年、何事もなく住み続けることが出来たら、草の話を小さな一卷に集めて、子供や古い友人に読んでもらおうと、思い立ったのも早いことであつたが、まだその時には『野鳥雜記』には考え及ばなかつたのである。

鳥は旧友川口孫治郎君の感化もあり、小学校にいた頃からもうよほど好きであつた。十三歳の秋から下総しもとうさの田舎にやつて来て、虚弱なために二年ほどの間、目白や鶉ひわを捕つたり飼つたりして暮した。百舌もずと闘つたこともよく覚えてゐる。雪の中では南天の実を餌えさにして、鶉ひよどりをつかまえたことも何度かある。雲雀ひばりの巢の発見などは、それよりもずっと早く、恐らく自分が単独なに為し遂とげた最初の事業であつて、今でもその日の胸の轟とどろきが記憶せられる。小鳥の嫌いな少年もあるまいが、私はその中でも出色であつた。川口君の『飛驒ひだの

鳥』、『続飛驒の鳥』を出版して、それを外国に持って行って毎日読み、人にも読ませたのは寂しいためばかりではなかった。少なくとも私の鳥好きは持続している。この砧きぬたの新村の初期には、野は満まん目もくの麦生むぎふであり、空は未明から雲雀の音楽を以て覆もつわれていた。それが春ごとに少しずつ遠ざかり、また少なくなつて行くのに心づいて、段々に外へ出て鳥の声を求めるような癖を、養わずにはいられなかったのである。そこへさして現れて来たのが、野鳥の会の中西悟堂君という無双の鳥好きとであつた。私は五十年も東京にいながら、まだ中国の土音どおんが抜けきらぬほど耳が悪く、また口真似くちまねが拙であるが、中西氏はその正反対で、従つてまた鳥の名を教える名人でもあつた。あの早起きと健脚とは附いて歩けぬので、ほんの通信教授見たいな指導しか受けなかつたが、それでも少しずつ新しいことを学んだ。第一にはうちの近所の木にも、存外色々の鳥が遊びに来るということ、次には子供の頃に覚えたと思つていることにも、かなり間違つていた点が多いということである。元来私は早合点をする質たちだから、今だつてもまだ誤解があるかも知れない。がとにかくに氣を付けたり思い出したりする事が、これでまた一つふえたのである。

私の家では、始めには庭に何物をも栽うえない主義であつた。木は門を出ること数歩にして松でも何でもある。草は抜ききれないほど色々のものが生える。どんなものが先まず生え

て来るか、見ようと思つて空地にして置いたのだが、あまり土埃^{つちぼこ}りが立つというので芝を張った。そうするとその隙間から顔を出したのが、隣の地面からの根笹の芽であつた。

これは棄^すてて置くと笹原になるから鋏^{はさみ}で切つた。その次には職人が食べてほうつたかと思ふ梨の芽生えが二本、松が一本と片隅に合歡^{ねむ}の木とが生えた。これだけは約束だから成長にまかせ、もうそのあとは構わずに置くとよかつたのだが、春になって気がかわつて梅をたつた一本、竹垣の近くに移植したのが病みつきで、秋はその隣へ小さな木犀^{もくせい}と山茶花^{さざんか}、安^{あん}行^{ぎよう}からは富有柿^{ふゆうがき}の若木が来る。いけて置いた丹波栗^{たんばぐり}が芽を出す。何やらかやら皆大きくなり、おまけに隣地の檜^ひの木までが林のように茂つて来て、目隠しにはよいが日陰が多くなつた。幼な馴染^{なじみ}の草などは、大抵^{たいてい}は十分な日の光の中で育つものばかりだから、こんな処には見切りをつけて、ずんずんと野外に退却してしまい、家のまわりにはいやな草ばかりがはびころうとする。雨でも降りつづいて五六日も出ずにいると、すぐに化物屋敷のようになって心までが荒びるので、近年は草取りが夏秋の日課になつてしまった。人も草取りを日課にする年になると、もはや少年の日の情愛を以てこの物に對することが出来ない。この変化は相応に寂しいものである。

よい草いやな草の差別は子供もするが、標準は違っている。かたばみは我々にとっては

迷惑至極な草だが、彼等はあの葉の珍らしい形と、実が胡瓜のようなのに興味をもつ。かなりほおずきなども怖ろしいやつで、うっかり一本を見のがすともう翌年は畝中に満ち、抜いても棄てても後から出てきて、小さななりをして花をもち実が熟する。どうして退治しようかと思うほどであるのに、孫どもはやつて来ると先ずそれに目を著ける。杉葉が畝に入ると飛び上るほども農夫が騒ぐのは、一つには根が深くて除きにくいためもあるが、それがまた土筆採りの子供を誘引して、畝を踏み荒される氣づかいもあるからであつた。佇んでただながめるだけなら、ああ美しいと思うような草でも、土地を再び曠野に返すまいと思えば、精出して抜かねばならぬものが多い。それを承知の上で雑草の方にも、驚くような繁殖力、智慧と名づけてもよいほどの対抗手段をもっていることが、子供でないだけに少しずつわかつて来た。触れるとすぐに莢が弾けて、遠くまで種子を飛ばすものがある。蔓が容易にちぎれて残りだけでまた根付くものがある。あるいは地獄蕎麦とも呼ばれる草のように、悪く臭いので人を近づけぬものもある。環境に応じて大きくも小さくも、形を色々にかえて生きて行こうとする努力などは、ある草は全く知らず、他のある種には特に著しい。自然の始めからの配慮と言おうよりも、何だかめいめいの発明の如くにも感ぜられる。自身庭に降りて直接の交渉に当るまでは、眼の前にいながら丸で知らずに

いた。子供でなくなったということも必ずしもそう悪いものではない。私は今も草取りによつて少しずつ学んでいるのである。

おかしい経験は人とこの話をして見たいと思うのに、大抵の場合は草の名を知らない。

金田一春彦君が二夏つづけて、かくしに植物図鑑を入れて教えに来てくれた。庭や門前の僅かな面積に、もう三十種に近い雑草が算^{かぞ}えられる。それに一々名があつたことが、むしろ不思議なくらいに私には感じられた。これが日本の植物学の進歩なのであろう。畔田^{くろだす}翠山^{いざん}の『古名録』というような、最も綿密な本草書^{ほんぞうしょ}を見ても、まだその中に掲げてな

い草が大分あつて、それにも立派な標準語が附いている。ただそれを引用して素人同志話をしようとしても、相手も知らぬのだから間に合わぬだけである。話題になる草は昔から限られていて、それも少しずつ数を減じて行くのではないかと思われる。せつかく気のきいた佳^よい名が出来ているのに、この毎日見るものをこんなとかこういうとか、面倒でしかも不精確な描写に任せて置いては、それこそ話にもならぬのである。今度の国民学校にも頼まなければならぬが、私の『野草雜記』も働かずにはいられない。ただそれには十年が少し短かすぎたというだけである。

小鳥の方でも実情はこれとよく似ている。私は近年の方言集をあさつて、かなり数多く

の草と鳥の名を比べて見たが、多いのは一つのものの異名のみで、その種類は不思議なほどにも限られている。久しくこういう話題の管理を、少年の手に委ねてしまつて、省みなかったということも原因の一つかも知れぬ。もしそうだとすると今になって少しばかり、樹蔭で草をむしり鳥の声に耳を傾けようとしても、急にそう新らしい経験の得られぬのもやむをえない。それにまた彼等の社会にも、やはり免れ難い生活の変化があつて、古い約束などは守つていられぬようである。草に外来の新種が幾つか加わり、または遠くから引移つて来たものがあつて、それが案外に幅を利かしているように、鳥にも新たな危険が多く、もう以前ほどは悠長でなくなっている。四十雀しじゅうからでも藪鶯やぶうぐいすでも、来たかと思うとすぐに行つてしまつて、遊んでいようとする心持が少しもない。殊ことに頬白ほおしろなどは囀さえずりまでもかえたらしく、何だか一年増しに歌の聲が短くなつて、一筆啓上 仕 候 などとは、聴いてもらえそうもなくなつた。現在残っている幾つかの鳥の昔話は、どれも皆あの挙動や鳴声の写実味に根ざしている。もしもその根拠が揺ぐようだったら、後は幼ない者までが印象を拒むことになるであらう。新たなものがいまだ生れず、古い心持は先ず消えようとするこの淋しい過渡期に、ちょうど世に出て行く記録だということが、前から少しでもわかつていたならば、また若干の用意もあつたであらうに、私は漸ようやくこの頃にな

つてそれに気付いたのである。いかに閑人の閑事業であつたとはいっても、あまりにその散漫であるのに私は恥じている。

今一つの思いがけぬ滑稽は、この住宅地の周囲の光景が、こんなにも變つて行くものとは私は考えなかつた。家を移した当座の数年は、二階の寢床から遙かに多摩川対岸の岡が見えた。その頃はまだ眼もよかつたので、いつとなく森や樹木の形に親しみをもち、何度か目標をきめて川を渡つて訪ねて行つたこともある。西の窓からは国境の連山がよく見えて、右の端は秩父の武甲山に大菩薩、一度相模川の流路でたるんで、道志・丹沢から大山の尖つた峰まで、雪が来たり雲がかかったり、四季時々の眺めには心を惹かるものが多く、小鳥の去来ということも、終始これと結び付けて考えるようになっていた。それが一方は近くに高い家が建つてたちまち見えなくなり、一方は樹木が一体に成長して、僅かに葉が落ちてからちらちらと隙見をするだけになった。南の正面には高い松の木が二本あつて、春は黒鵜や小鵞が来て啼いた。二本合せると誠に好い恰好で、月があの方角から出るのだつたらなどと評判をしていたが、ある年の火事に遭つてその一本が枯れて伐られ、残りは一向にくだらぬ木になり、鳥もまた段々来なくなつた。「たけに草」の目の覚めるような美しさを見せた西隣の空地は、ほどなく土が古びて再び芒に占領せら

れ、今年はいよいよ隣組が開墾^{かいこん}して大根を播^まいてしまった。こんなに変わってしまうものなら、あの頃写真を撮るかスケッチをしてもらって置くか、自分で画を学んでもまだ間に合う位であつたのに、何もしないで十年も経ってしまった。今頃どのようにその噂をして見ても、それが自分の感じていた通りに、描き出されるわけはないのであつた。一度こういった記念の書を出そうと思ひ立つて、それにいつまでも執^{とら}われていなかったら、あるいはもう少し安らかな、人を楽しましめる雑記が出来たかも知れぬ。私のすることにはいつもこんな失敗が多い。

野草雜記

一

この喜多見の原の家に住み始めてから、今度はもう第十回目の春が復^{かえ}つて来る。この間における草木の有為轉變は、一つの巨大なる歴史であつて、これに比べると人はむしろ常^と磐^{きわ}であつたとも言える。最初私たちは久しい町の生活に馴れてささやかなる庭前の草をも容赦しなかつた。必ず「年々愁処生」というような詩の句を思い出して、それを成長させて置くことが、我身をはふらかすわざのように考えていた。そうこうしているうちに道路は小砂利になり、または雨の後の泥にまみれて、根強いものまでが次第に退いて行つた。家のまわりの植物は萩^まが先ず衰えて、今では僅^{わず}かに一^{ひと}叢^{むら}二叢^{ふた}が、譜^{ふだ}第^{だい}の家の子のような顔をして培^{つち}わ^かれている。黄なる山菊は残そうと思つたが、去年などはどうやら咲かずにし

まった。春の草では董^{すみれ}がただ一種だけになって、蒲公英^{たんぽぽ}はもう疾くに姿を消している。そうしておかしいことには今生えようとしている草は、大抵^{たいてい}は主人が名を知らぬものばかりである。草の名の教育などは、我々は六つ七つの時から以後、絶えて与えられもせずまた受けようとしなかった。それ故に幼^{ゆえ}ない愛着は永く伝わり、新たなる感歎の時あつて催されると共に、測らずもまた人間の無識が、いかに多くの事蹟を閑却していたかを、心づかしめる機縁ともなるのである。

二

杉葉はこのあたりの畠を打つ人たちに、何よりも憎まれてゐる草であつて、その根は地獄にも届いているように、戯れている者さえある位であるが、畠を切り均^{なら}したばかりの私の家の外庭には、毎年待っている子どもがあるのに、もう一本でも生えて来ようとしなない。全体どういふ場処に生えるものなのかと、氣をつけて見てあるいと、時々は湿^{あせ}りがちな田の畔にも、日蔭の多い若木林の端にも、驚くほど沢^{たくさん}山の小法師の、並んで立っていることがある。

そう条件はむつかしくないらしいのだが、不思議に人間の住む所を避けて繁ろうとする。庭は全く人の踏む足の数がこの土よりも多い。それを彼等の開拓者が嫌うので、根や養いだけの問題ではなかったのである。芒なども性癖がこれとやや似ている。隣の空地ではある季節にはこれだ一色に蔽おおわれて、色々の虫の声を宿し、小路を隔てて一斉に袖を振る様子は、招くと言おうよりもむしろデモンストレーションに近く、風が吹けば盛んに穂綿を流して来るのだが、私の庭へは僅かな片陰以外、めったに下りて土着しようとはしない。一時は熱心に闘って抜き棄すてたものを、この頃は一株移植して見ようかと思うほどになった。これとは反対に根笹は草に隠れて、地続きの一方の空地には覗のぞいても眼につかぬのに、いつになってもその根が走って来ることを止めない。逕こみちにも出れば芝生の中にも出る。垣根の下はもとより、中には五六間も飛離れて糸のような筍たけのこを抽きんでようとする。これだけは銚はさみを以て切つてしまわずにはいられぬのであるが、考えて見ると竹は人に最も親しむ植物の一つで、鳥であつたらどの位喜ばれたか知れない。

それからタケニグサもこの土地へ来てから、始めて気心のよくわかった野草である。郊外はこの新建てでも、一度はこの草に^{おびや}刳かされて、いかにも文化住宅の浅はかさを、思い知らされずにはすまぬような時期があるように見えるが、少し程過ぎると、これも^{すすき}薄よりはなお素直に退散してしまう。今まで日本にこの草のあることを知らず、あるいは土^{どかた}芳草^{ぐさ}などというヒメムカシヨモギと共に、遠い国からでも渡って来たもののように、思っている人の多いのも一つの歴史である。タケニグサの生活機会はかなり限られているようである。即ち土を^{すなわ}掘り返して日の光が一面に当り、静かに進み寄る小草のまだ乏しい間に、たとえば植民地の最初の自然移民などのように、ここに暫く^{しばら}の盛りを息づくのである。この植物の褐色の汁液には、少しの臭気がありまた毒もあると言われる。それよりも人に迫るのはあの熱帯風な大がら、時には見上げるほど伸びてしまうこと、及びこれほど数多くの種子が飛び散ったらどうしようと、思う位に実のなることであるが、これは全く魚の子のようなもので、大部分は無結果に消えてしまいうらしいのである。私の家でも三年ほどの間は、タケニ草を^{かたき}目の鑑にした。蹴飛ばすほどまで大きくは決してさせなかった。指の汚れるのを忍んで茎を持つてそつと引くと、するりと附いて来るようにして必ず途中で根が切れるので、一層憎らしく思われたのであったが、めったにはその古根が復活したの

を見たことがない。今でも折々は種が飛んで来て、一二寸の芽生えを育てているのを見かけることがあるが、それはそれはいたいで、垣根の外にいる従兄弟いとことは似もつかない。素性を知らなかつたら豆盆栽にでも、したくなるような姿をしている。それでも抜いて棄てるのは伝統と言つてよい。ちようど蟒蛇うわばみの昔語りがあるばかりに、きれいな小蛇が殺されるのによく似ていて、こちらは更に記憶が生々しいのである。私は前かた上州の利根とねの奥に遊んでいて、偶然に路傍にこの草の一群を見たことがある。土工と日の光がたまたま同じ条件を設けたために、幸運な一粒がどこからか帰つて来て栄えたので、この時ばかりはさすがにあななつかしと、昔の敵を愛する気になつていた。流転はまことにこの一族の運命であつたかと思われる。それがあたかも今大都市の周辺に、やや引続いて安住の地を供与せられ、いわゆる第二の故郷を念がけている点は、むしろ著しく我々の境涯に似ていたのである。

四

字引を引いて見るとこの草の本名チャンパギク、博落廻はくらくかいとあるのが我々を考えさせる。

日本に最初からあつて名がなかつたか忘れたか。ただしは新種の雑草と同じに、物のまぎれに入込んだのが見つかったか。わざわざ名を添えて輸入するだけの、物好きはありそうに思われぬのみか、それでは現在の分布を説明することが出来ぬのである。元からあるものは一応は元からあつたと認めるのが自然だ。そうするとこの草が久しく注意せられず、もしくは注意する者があつても地方的で、これに全国俱通ぐつうの名を生ずるに至らなかつたと解して置いて、船載はくさいの証跡の後日出て来るのを待つより他はあるまい。自然と文学という問題は、この方面からも一度は近よつて見る価値がある。奈良や京都の郊外にタケニ草の繁茂する機会がなく、たまたま繁つていてもそれをただけうとしと感じて、来て見る文筆の士もなかつた限りは、記録に伝わるような本名は生れようがない。そうして記録の天然は人も知る如くごと、甚だしくはなは狭隘きようあいであつたのである。花ならば梅桜あやめに菊、鳥獸うぐいなら驚時うぐい鳥猪ほとに鹿し、まるで近頃の骨牌かるたの絵模様が、日本の自然文学の目録であつたというも誇張でない。これは風雅の選択が嚴峻を極めて、些すこしく俗氣のあるものは吟詠の料としなかつたためのように、千年の長きにわたつて解しつづけていたのであるが、そればかりは何分にも信じられない。現在の文士などはもう大分自由なのだが、それでなお我々の間には、油絵に静物がもてはやされる程度に、咏物の詩は起らないのである。一つには

歌の詞形の短かいためもあるが、主たる理由は一言でいえば知らなかったのである。知らない故に歌になるような好い名前が生れなかった。すなわち斥しりぞけたと言おうよりも断念したという方が当っているのである。

畔田翠山翁の『古名録』などを見ると、牡丹をフカミグサ・ハツカ草という類の五音節語は、何百というほども設けられている。名がなければ文学の生れぬのは当り前だから、これを試みようとした者は以前もあつたのだが、それが多くは我わがまま儘の、ちつとも適切でないもので人望がなく、日本の言語として通用しなかったのだから名誉でない。国に広汎なる文芸を起そうとするならば、先ず言葉の問題を一通り解決して置かなければならぬ。歌だから咏物の詩だから事はまだ小さいが、すべてがこの調子であつては我々の筆舌は束縛せられ、少し込入った気持は上品には人に示すことが出来ない。いくら本名でもチヤンパギクでは歌にならぬということが、偶然ながらも我々に大きな暗示を与えている。それでこの線路を辿たどつて、もう少し前の方へ話を進めて見ようと思う。

五

日本に佳^よい単語を増加して行こうという努力には、動植物学者もたしかに参与しているが、幸か不幸か彼等は散文家であるために、少しでも歌よみの苦勞を察してくれない。どこの国でも学名は本名でないのだが、我^{わがくに}邦では精細を旨とするの余り、二階三階を積重ね穴藏をほり下げて、時には三十一^{みそひともし}文字と背^{せいくら}競べをしようという長い名が作られている。殆^{ほとん}と音語の終極の用途を、念頭に置かぬ者の所行である。この状態で新七草でも投票すれば、選挙肅正などはとても望まれぬことで、誰しも上品な句や歌になりそうな名を持つ草へ、入れたくなるのは免^{まぬ}かれぬ弱点であろう。すなわちいつまでもあれば名が俗だなどと、負^{まけおし}惜みをいつてあきらめるものが多いわけである。これに比べると郷土の人たちの附けた名は大抵はもつと實際的であつた。歌にもうたわれず文句の口拍子にも乗らぬような草の名は、生れたかも知らぬが承認せられてはいない。というよりもむしろ歌や文句の中から、孕^{はら}まれたらうと思うものが多いのである。これは統計の上にも多分現れることと思うが、今まで最も普通であつたのは三音節、クサの語を下に添えて五字の一句をなすもの、次には一つのテニヲハの余地を存して、四音六音でこしらえたものが多い。花とか鳥とかを附けて呼ぶ物の名もこれと同様で、かねて法則を意識していたのではないまでも、いわゆる語路^{ごろ}の悪い言葉は、忌んで採用しなかつたらしいのである。これが深見^{ふかみ}草一流の歌

道のかぶれでなかったことは、和歌には向かぬが民間のうたいものや童言葉に、ぴたりと合っているものの多いのを見ればわかる。潜む動機がもしもありとすれば、遠く溯さかのほつて文と唱えとの、いまだ分れなかった世に求めなければならぬのである。

六

そこで立戻つて再びタケニグサを説くことになるが、私はこの名のいつ頃からあるのかを考える前に、先ず以てある一つの野草に、どうして名を与える必要が起つたかを尋ねて見たい。最もよくある機会は効用の発見、葉や染料のために野山を分けて、これ一つを捜さなければならぬ時であろうが、今日普通にいう竹を煮ると柔やわらくなるという説は、何分にもまだ信用が置けない。果して一人でもそんな実験をして見た人があるかどうか。確かめもせずに語の解釈に供するのは悪いと思う。あるいはその点は事実^とに反するまでも、古人が誤り信じてそう名づけたのだろう。タケニというからにはそう釈とくより他はないと、思っている人があるかも知れぬが、それはもう少し多くの事実を知ってからでないか、我々には到底とうてい断言の出来ぬことである。そうそう自分たちの先祖をまちがえばかりしたよ

うに、証拠も碌^{ろく}にないのにきめてかかることは、感心せぬ態度だと私は思う。

だから我々は先ずこの植物に対して、現在土地土地で与えている名前を、比べ合せて見る必要を認めるのである。いわゆるチャンパ菊の異名を知った土地はあまり多くない。最近に耳にしたのは三重と奈良県の堺の山村でゴウロギ、ゴロはあの地方でも大きな石のごろごろとしている処のことだから、そのゴロによく生える木という意味に解してよかろう。東京京都の人だけは知っておらぬらしいが、ゴロもゴウラも全国にわたって、かかる礧^{ぎよう}か

不毛の地をそう呼んでいる。起りは多分岩くら、くらししなどのクラであろう。日本人はこういう語の用途を分化させて行く場合に、いつもいやなものだけを濁音にする癖があるようだ。現にこの土地でも土と交った小石の堆積している処はガラ、大きな石のある処だけをゴロというとのことで、この二つの語は別々とも考えておらぬようだから、つまりは少しでも似つかわしい音に偏^{かた}るのである。信州の上伊那^{かみいな}から来ていた青年は、国ではタケニ草をガラガラというと言った。その時にはこの植物がうら枯れて後に、秋の風に吹かれる様子を形容したものかと思ったが、あるいはその気持は加わっているにしても、やはり発端はまたガラに生える草というにあった。それが大きくなって木のように見えるからゴウロ木で、この程度的一致ならば、別に一方から伝えなくとも、偶然にも起り得た

のである。

七

越後の西頸城^{にしくびぎ}地方で、この草をツンボグサというわけはまだはつきりしない。土地の人ならばまだその命名の氣持を覚えてゐるかも知らぬが、福井附近などで芒^{すすき}の穂をミミツンボというのと、あるいは關係のある言葉かと考えられる。これとても竹を煮て軟かくするといふ噂と同様に、かつてその經驗をした者はあるうと思えぬが、何だか氣になつて近よつて行けない故に、輕々しくそういう名前が承認せられることになつたのであらう。下^しもつさいんぼ
総印旛郡の草原地には、あるいはまたドロボノシンヌギという名も行われている。これも一つだけ聴くとあまりに奇拔だが、以前の笑いの材料には尻といふ語が多かつた。例えば細^{ほそい}菌をサギノシリサシ、近頃入つて來たと思ふ竜^{りゅうぜつらん}舌蘭をヌスビトノシリサシといひ、こまかな針のある「とげそば」といふ湿地の草の一名を、ママコノシリヌグイと呼んでゐる人もある。以前は尻拭いには木や草の葉を用いたので、泥棒ならばこれを用いるだらう。もしくはこれで沢山だという意味からでも、半ば戯れにこういう名を案出せられ得たので

ある。立会つて竹を煮させて結果を見た人だけが、タケニグサの命名に参与したと、見なくともよい一つの理由である。

それからもう一つは私などの郷里、播磨はりまの一部にはオオカメダオシという方言がある。

狼がこの草を食うと酔うて倒れるから、こういう名が生れたように説明する者もあるが、この経験などはいよいよ以て試み難いものである。狼が草を食うということが既に考えられず、それを見ていて酔っぱらうのを確かめた人などは、捜しまわるだけのものではないのである。ただ自分等がこれによつて感ずることは、もしもタケニ草の故郷が外国であり、または早くから現在の地であつたならば、こういう名は恐らく発生しなかつたろうということである。伊勢・信濃のガラ・ゴウロギも同じことだが、この異様な植物はもと狼でも棲息しそうな地にあつて、あらかじ予め今日の郊外居住に備えていたのである。ただ人間が彼等の存在に注意し始めた機会が区々まちまちであつて、こうして私のように昭和の時代に入つて漸くようやこの一つの生活に美しい意義を見出した者さえあるのである。詩の発展はすなわち無限であらうが、それは今少しく未知の自然の方に、眼を向けかえなければならぬように考えられる。言葉が制限であり、習慣が附け紐である限りは、要するにそれはただ蕪村ぶそんのいわゆる「水桶にうなづき合ふや瓜茄子なすび」である。

八

そんな憎まれ口をきくのが私の目的ではなかった。チャンパ菊の異名に今一つ、辞書にも認められたササヤキグサというのがある。物にも似合わぬ佳い名である。この言葉については色々の空想が起る。たとえばあの鈴なりになった枝の種子が、風に吹かれて幽かに鳴るのかとも思われ、実は私もその音を聴いたような気さえする。しかしこれは明かに空想であつた。種は柔かな綿のようなものに包まれて静かにこぼれている。そうして梧桐あおぎりのようなあの大きな葉は、がらがらならともかくも、ささやく音は立てようとも思われぬのである。比較はどこまでもして見なければならぬ。東京の近くでは相州の津久井つくいの山村などが、どこでもタケニ草をササヤケといっている。即ち遠くから見てもこの草の連なつた穂先が、笹に似てやや焼けたような色を帯びていることが、この名の与えられた元の動機であつたらしいのである。これをササヤキ草と横なまる位のことは、少しく風流心のある者ならば誰にでも出来る。まして適切でもない色々の文芸用異名に、久しく馴らされている人ならば喜ぶかも知れない。ただ私たちはまだどこにそういう語の行われているかを知

らぬだけである。これがもし東京の現象であるならば、やがてはまた普及しかつ新たな解説が副^そうことであろう。大よそ一通りこの事情が伴^そつていての上ならば、それを觀察しているのも決して興味の無いことでない。

近年私の家の庭から追払われたタケニ草は、僅^{わず}かな道路を隔てた西隣の空地に往^いつて今は住んでゐる。ここも芒^{すすき}が一年増しに根を張つて来て、それと昔から仲のよい萩や「われもこう」の、咲きまじつた野原に復^{かえ}ろうとしているが、まだその片端には普^ふ請^{しん}で土を動かした部分があつて、そこばかりは堂々たるタケニグサの林である。タケニという言葉もあるいはこれから出ているのかも知れぬ。梢^{こすえ}が伸びきつてことごとく茶色の細長い花^{はな}莢^{ぎや}を附けたところは、山の野生の小竹原を思わせる。竹にもややこれに似た色彩を見せる季節があるような気がするがまだ確かなことは言えない。とにかくにこのようなよく嫌われる草にも、美しく見える日が二日か三日はあつて、それが最も竹らしく感じられる時でもあつた。ちようど初秋のしつとりと露の置く晩方などに、立止まつて見ていたいような氣持になつたことも折々ある。それよりも忘れ難いのは夜の引明けに、二階の寢室の窓を開いて、ああ美しいと思つて見たことが何度かある。それが雨でも降るか荒い風でも吹くと、すぐにもう狼藉^{ろうぜき}になつてしまふのである。郊外の朝と夕方は存外に多事なもので、私は

氣樂だからこんなものにも目を留めているが、省みられぬ場合の方が多いことと思う。そうして去年まで確かにそうだったが、この夏はもうどうなっているかわからない。

九

たった十年ばかりの、しかも飛び飛びの觀察などは、今の植物学に逢ってはかなわぬにきまつている。しかし私は前に述べた事実に拠つて、今は大よそこれだけの歴史を推測しているのである。このタケニ草の最初の郷里は、むしろ人げの少ない山中であつた。山が崩れたり水が荒れたりすると、何よりも早く飛んで来て、そこに芽を吹くのはこの草の種子であつた。日本は地變稀まれでない国だから、順にそういう処をまわつても、血統は絶えなかつたらしいのである。それが近年は土地利用の型が變つて、人里近くにも遊ばせてある場処が出来、それも底土を切つたり覆くつがえしたりする故に、追々おいおいと彼等の進出が始まり、少くとも都会の周囲では、いわゆる異国情調を發散するようになったのだが、元々お互いによく似た身の上である以上は、これはただ我々の忘却、もしくは最初からの無関心以外の、何物をも意味しないのである。我々の先祖も山に拠り、山あいの小さな空地のみを捜し求

めて、末々その後裔こうえいがこんな海端の平蕪へいぶの地に、集合しまた放浪しようとも思わなかったことは同じだが、人間の長所は次々の境涯に應じて組織を拡大し生活ぶりを変え、新たな名称を認め新たな美德をたたえるに急であつた余り、古い縁故のある若干の天然を疎外し、また時としては敵視しなければならなかつたのである。しかしタケニ草の世もまた開けた。人と交渉する言葉は多くなり、それがまた追々と耳に快いものとなろうとしている。この落莫らくぼくたる生活があわれを認められ、終ついに人間の詩の中に入って来るのも、そう遠い未来ではないように思われる。

蒲公英

一

春になって郊外の路をあるくたびに、何度となく考えて見たことであるが、タンポポは日本の昔からの野の草だ。これが新しい春の日の光に耀かがやいて、黒い土の上に咲いているのを見て、眼を怡よろこばしめなかった人はなかったろう。そうすれば必ず名があつたはずである。歌を詠まなかった万葉時代の我々は、果してこの草を何と呼んでいたろうか。以前佳よい名があつて不幸にして忘れられたか。ただしはまた歌に向かないタンポポが古語であつたために、こうしていつまでも子供にしか省みられないのであろうか。我々の物の名は誰が作り、誰がこれから先は管理して行くのであろうか。こういう答のない色々の問が、今ではまだ野に充ちているように思う。

学者が都市に住んで標準語というものを守り立てるまでは、タンポポという草の名の行われていた区域は案外に狭いものであった。それが今日のように流行したものは、あるいは京都の子供の力であつたかも知れない。地方には今でもまだ幾つかの、大人が附けたかと思う名称が、何となく押込められて残っている。それが懸^かけ離れた遠くの土地において一致しているのは、偶然とは言い難いように思う。そういう中からあるいは今一度、昔使っていた尋常の日本語を、見出すようなことがないとは言われぬのである。

たとえば千葉県では上総^{かすさ}の各郡にわたつて、蒲公英^{たんぽぽ}をニガナという方言が行われている。以前春の野の草を野菜として摘んでいた頃には、確かに苦いということがこの植物の特徴であつたろう。鹿児島県でも奄美大島の北の村々はやはりこの草をニギヤナといい、にがから苦菜だと説明せられている。

それから今一つ、分布の更^{さら}に弘い方言がある。岐阜県では山に属する北半分、信州でも主として北信の諸郡において、クジナといっているのがそれである。俳諧寺一茶^{はいかいじいつさ}の『方言雑集』の中にも、ちようどあの人を咏^{えい}じたような、一章の白^{うすうた}唄^{うた}を書き留めている。

男やもめとクジナの花は盛り過ぎれば御坊^{ごぼ}となる

この御坊^{すなわ}は即ち坊主で、何人^{なんびと}もすさめざる淋^{さび}しい人のことであるが、この草の花が綿

になつて飛んだあと、あたかもがつそうのような頭になる点が似ていたのである。

クジナという名詞もまた飛び散つて奥羽おううの処々に行われている。例えば宮城山形の二県の南半分でクジナまたはグジナ、九戸くのへの葛くすまき巻附近ではクジツケアともいつている。羽前うぜんも米沢よねざわあたりはタンポポに近い花の名が別にあつて、嫩わかい葉を食料にする場合ばかり、クジナという語を用いるのである。越後でもグズナは野菜としての蒲公英の名であつた。多分は北信などの白唄と同様に、元はタンポポもクジナの花で通つていたのであろう。

佐渡にもクチクチナという村がある。土地によつては稀まれにはクデナという処もあるらしいが、その方は転訛てんかである。『倭名鈔わみょうしやう』には蒲公英和名フジナ、またタナともいうとあつて、タナの方は今は痕跡もないが、力行と八行とは、日本ではもと紛れやすい音であつた。即ち少なくともかつてある時代に、京都の上流の間にもクジナに近い語は認められていたのである。ただし何故なにゆえにこの草をフジ菜といったかは、今はまだニガ菜のように明かになつていない。『和訓栞わくんのしおり』には藤菜の意味であらうとあるが、少しも根拠はないのだから解説でも何でもない。それよりも今一足遠くへ尋ねて行つて、更にこれ以外にどんな名前があるかを、知つて置く方が私たちには楽しみである。しかしこうした気の永い穿鑿せんさくには果して世間の賛同が得られようかどうか。いつも一人で野中の路をあるいて

いる者には、一向いっこうに見当が付かぬのである。

二

タンポポの代りに行われている方言は、まだ幾つでも意外なものがある。信州でも山を越えて諏訪すわの湖岸に下ると、そこにはクジナもあるがそれよりもガンボウジの方がよく知られている。甲州でも国なかの平野はガンボウジ、伊那いなも上下二郡がすべてその通りで、飯田の城下にはまたガンボという語もある。クジナが行われている善光寺平ぜんこうじだいらなどにも、やはりガンボジという名が知られているのを見ると、これは花の方をさしていたものらしい。私の今の想像では、ガンボウジは子供などの頭の「おかっぱ」のことであつて、あの愛らしい花の姿を、形容した語ではなかったらうかと思う。これとよく似た例は白頭翁はくとうおう、歌にオキナグサという花の名の、土地さまさまの変化であるが、それは他日また別にお話をして見たい。とにかくこれとクジナとの間には、最初から語原の関係はなかったようである。

その次には越後の弥彦山やひこやまの麓ふもとの村などに、ゴゴジョウというのがまたタンポポのこと

である。これは諏訪あたりのガンボウジと、あるいは系統を同じうしているかと思うが、それもまだ変化の路筋を考えられぬ。同じ例は遥かに飛び離れて、南秋田の八郎潟はちろうがたの岸の村々に、ゴゴロツコまたはゴゴという語があるのは妙であるが、現在はまだこの二処以外に蒲公英をゴゴ、もしくはこれに近い音で呼んでいる地方は知らない。

同じ秋田県でも北秋田郡の一部はクマボ、山本郡ではクマクマという土地がある。青森県も二つの市を始め、津軽は全体にクマクマという村が多く、ただ北端の小泊こどまりなどにおいて、これをカコモコまたはクワモコといっているのである。あるいはアイヌ語からでも出たのではないかと思つて、念のためにバチエラー氏の辞典を引いて見たが違つている。福井県の南条郡にはカツポコという例があるが、これはむしろ後にいうタンポポの変化であつて、カコモコとは縁がないようである。

何にもせよ今は名の起つた理由までが、丸で不明になつてゐるのだから、歴史を問うことが殊にむづかしい、ところが他の一方にはなお色々の方言で、どうして出来たかを想像し得られるものが残つてゐる。誠にたわいもないことではあるが、それをはつきりと知つて置くと、後に類推によつて思ひの外ほかの解説が成立つかも知れぬ望みがある。先ず一番わかりやすいものから言うならば、信州北佐久郡きたさくの一部で蒲公英をチチグサ、これは疑うたがい

く乳草であつて、あの花茎を折って白い汁の滴るのを、母の乳房に思い寄せたのである。作者の髭男ひげおとこでなかつたことだけは断定しても差支さしつかえはあるまい。加賀の金沢でこの花をやケドハナというと、私に教えてくれた人もあるが、もしあるいはヤイトバナの記憶ちがいではないか。もう一度別の人に聞いて確かめたいと思つている。自分などの幼い頃には、タンポポの茎を折って折れ口を肌に押すと、小さな円い乳の輪が出来る。その上を麦の黒穂で叩いて、ちようどお灸きゆうの跡のようになるのを、ヤイトをすえるといつて遊んでいた。しかしそのためにヤイト草という新名を、この草に付与した実例はまだ聞いていないが、チチグサという方は信州と百数十里を隔てた、広島県の倉橋島くらはしにも同じ例があるのである。

それから今一つ兒童の命名になるかと思うのは、相州愛甲郡あいこうすす煤ヶ谷やの山村などで、蒲公英をピーピーバナ、東上総の海岸でビンビバナというもので、これはあの茎を切つて草笛を作つて吹いた者の、記念であつたことは言うまでもない。西の方では摂州の有馬郡など、シービビといったのも同じ趣旨である。私の在所はそれから十四五里も離れた処であるが、シービビというのは青麦の茎を折つて、吹きならす笛であつた。子供によつては麦の黒穂のことを、シービビというのだと思つている者もあつた。そうして自分もまた口

でシービビといって吹くためか、私たちの耳には明瞭にそれがシービビと聞えたのである。

三

紙やセルロイドの色々な玩具で育てられた人は殆ど想像も出来ぬ話であるが、以前の子供は春の立ち帰るを待ち兼ねて、こうして銘々めいめいの遊戯材料を求めたのであった。人が天然と仲がよくなるのも、本当にそれだけの理由があつたのである。しかもその玩具が時々まじの流行を追うたことは、昔もやはり今と同じであつた。その中でも起原が古く、何度も時を隔てて戻つて来たかと思うのは、タンポポの茎を折つて両方を少し割り、それを水の中に入れて、その外皮の円く反りかえるのを見ている遊びであつた。子供でなければそのような気の永い見物は出来ないと思う。これも上総の幾つかの郡において、今でもニガ菜の花をマンガマンゴといっている。それがいかなる理由から、そう呼ぶかを知らぬ人も多くなつたが、百年ほど前に著された深川元儁ふかがわもととしの『三州漫録』にその説明がしてある。市原郡の立野たちという村で実見したと言っている。小児は蒲公英の茎を割きいて置いて、「まんどまんごまがれ」という文句を唱える。そうすると草はあたかもその号令に従うかの如く、

徐々として曲つて来るのであった。これから遠く離れた愛知県の宝飯郡額田郡、また幡豆郡の一部においても、タンポポをマンゴと呼んでいる土地が今でもある。更に西の方に行つて大分県玖珠郡の山村にも、この草をマンガレと称する処がある。時を同じうしてこの遊戯が流行したのでないまでも、とにかくにいつの頃にか九州にも「曲れ」という唱えごととは用いられていたのである。

沖縄の諸島を見渡すと、タンポポの方言の今存するものは案外に乏しい。八重山と宮古との中間にある多良間という寂しい孤島では、この草をトウルクナーというそうであるが、その意味は『倭名抄』のフジナと共に、もう私たちには判らなくなった。それから琉球の本島まで戻つて、一ばんよく知られているのはワーオーバー、ワーは即ち家猪のことで、本来はこの獣の鳴き声から出た名である。だからワーオーバーは「豕の青葉」だと思つている人も多いらしいが、果して蒲公英を豕に喰わせるかどうかは確かでない。那覇の周囲その他のある村々では、これをマーウーフアーという者もあり、それを真大葉の意味だと説明してくれた学者もあるが、この二つの語はもと一つらしいから、かえつて双方の解釈の共に誤っていることも危まれる。それから今一つ、これもやはり那覇附近にナガリールーという方言があつて、これは児童の国語かと思われる。沖縄音ではmが殆ど常にnに変

化し、例えばイマ（今）をナーといい、ミヤグスク（宮城）をナーグスクと発音している。だから恐らくはまたこのナガリールも、「曲る」という語の命令形であって、近世この島でもタンポポの茎を曲らせて、嬉笑^{きしょう}する童戯が行われていた痕跡であろう。

上総はどういうものか、妙にこの植物の異名が多かった。茂原^{もばら}の近くではあるいはオヤコウコウバナともいうと、これも深川氏の『漫録』に見えている。私の想像ではもとは有名な昔話などがあつて、それでこのような名が行われることになったかと思うが、とにかく親孝行という理由は、この花がよくお使いするからであつた。信州の子供たちは、タンポポの花の白く綿になったものを手に取つて、「お坊お坊飴^{あめ}買いに行け」と言いつつ、ふつと吹飛ばせて楽しむということが、小山真夫氏の『小^{ちいさ}県^{がた}民謡集』には見えている。私の生れた瀬戸内海の浜近い村にも、これと同様の遊びはあつたが、唱えごとは全くちがつていた。今でも思い出すのは春の青空にあの花をかざして、幼ない子たちが皆一様に、「あーぶら買いに酔う買いに」と言つて、あの花の穂をふつと吹いた。蒲公英の種子は細長く下ぶくれで、少しばかり徳利の形に似ていた。あれが空中に飛び散つて行く様子を見て、我々は子供が徳利を手を下げて、酢や油を買いに行く姿を思つたのである。そうしてこの遊びもまた弘く行われていたと見えて、対馬^{つしま}の島の浅藻^{あさも}という村でも、やはりタンポ

ポを「酒買い坊」といつている。

四

多くの野の草が稚子^{おさなこ}を名付親にしていたことを知って、始めてタンポポという言葉の起りが察せられる。タンポポはもと鼓^{つづみ}を意味する小児語であつた。命名の動機はまさしくあの音の写生にあつた。それが第二段に形の鼓と近い草の花に転用せられることになつたかと思われる。小野蘭山^{おのらんざん}の『本草綱目啓蒙^{ほんそうこうもくけいもう}』に、蒲公英を越^{えつちよう}中国でツヅミグサと
いうとあり、しかもこの地方でタンポポというのは、花生けその他の竹の筒のことである
のを見ると、やはりあの鼓の音も元はタンポポと聴いたのであつた。中世盛んに流行した
歌問答の昔話にも、西行^{さいぎよう}とか宗祇^{そうぎ}とかいう旅の歌人が、摂津^{せつ}の鼓の滝に来て一首の歌
を詠んだ話がある。

津の国の鼓の滝を来て見れば川べに咲けりたんぽぽの花

そうすると傍に草刈りの童子がいて、第三の句を「うち見れば」と改めてくれた。宗匠
自慢の鼻はたちまち折れ、その童子の何とか明神の化現^{けげん}なることを知つたという類の物語、

これを詳しく説明することは退屈だが、とにかくこの話の出来た頃までは、人がタンポポの本は鼓の名であることを知っていた。もと後年この楽器の流行がすたれて、小児は名の起りをもう忘れてしまったのである。

タンポポとよく似た名の付け方は、なお他の色々の楽器にもあった。例えば越中から越後の平野にかけて、お寺の本堂の大きな鑊鉢にようばちをガンモモ、家々の仏壇の小さな鉦かねを、チンモモというのは普通の語である。ガンとかチンとかいったばかりでは、幼ない人たちにはこれをあの音の形容と認められなかった。余韻の暫しばらくの間モモと続く所までを、ぜひともその名称の中に入入れなければ、彼等には気がすまなかったのである。ところがいよいよ本堂の大鉦をガンモモと呼ぶことにきまつて、また暫らく経つと今度は形の似たものにこれを転用する。越後の奥から信州北部にかけて、櫛かしの実のうてな、我々がドングリのオワンといい、または戯れて花嫁のこうしなどと呼ぶものを、子供は皆ガンモモといっている。寺の鑊鉢とは大小の非常な差があるが、形だけではなるほどよく似ている。蒲公英のタンポポになつて来た順序も、全くこれと同じであつたと思う。

あまり長くなる故ゆゑもう今回でこの話はおしまにする。小児はタンポポの最初の発明者ではあるが、決して我等の如くいつまでも自分の手柄を記憶していない。鼓というのが三

河の万歳まんざい以外に、使う者がないようになれば、後はただタンポポの音の快さと、その花の鮮かな色あざやとを楽たのむばかりで、言わばその次にもっと面白い名前の、現れて来るのを待っているのである。そうして成人のようにいつまでも、無意味なる符号を守っていることは出来なかった。だから少しずつ新意匠を加えてこの音を変化させようとしているのである。

タンポポは私などの国ではタンポであった。近畿の府県ではあるいはタンポコといい、またはタンポンといった。東海道でも駿河すろがではタータンポまたはタータンバ、伊豆の入口の方はタンタンポ、奥伊豆行くとタタンポコ、相州の三浦ではチャンポ、甲州の東八ひがしや代つしろはチャンポポ、上州妙義山みょうぎさんの周囲はチャンポコ、それが日本海上に飛んで佐渡の外そ海府とかいふもチャンポンポン、同じく河原田かわはらだではチャンチャンポンポンとさえいつている。

私たちの今住む三多摩地方には、タツポまたはタツタツポという例がかなり多く、これもまた一筋東北の方に向っている。その中の最も大きな変化は、岩手・青森・秋田の三県においてテテポポまたはテデツポツポなどという例である。南部の九戸くのへではデデポツポ、北郡の浦野館うらのだてはデテココ、羽後うごでも田沢湖岸はデデポツポであるが、横手・横沢あたりはテテポツポといっている。ポツポは恐らく鳩の鳴き声で、これも今までタンポポ一類の名が、余りに意味がないために、出来るだけ鳩の声に近づけて聴こうとしたのである。こ

ういう心の願せみいは小児には常に多い。後に述べたいと思うツクシという春の草なども、今では秋の蟬せみのツクツクハウシと、その名をおもやいにしようとする子さえあるのである。

虎杖及び土筆

方言量の多少

近世始めて海外から持込まれた物品だけには、あるいは一種特別の法則が働いていて、そのために必ず存在すべき方言の分野を、紛乱させたのではないかと疑^{うたがい}はあり得る。しからば国土の開発以来、この民族と相^{あい}生^{おい}に今も伝わっている山野の草木はどうあるか。何よりも先に我々の注意すべき一事は、松竹梅桜の類が古今南北を一貫して名一つであるに對して、一方にはここに説かんとする虎^{いたどり}杖^づまたは土^{つくし}筆^{づと}の如く、丘を越えるともう異なつた称呼を、帶びているもののあることである。方言何によつて起るかという問題は、当然にそこまで溯^{さかのほ}らなければならず、方言の区域ありという論者もまた、この顯著なる新旧の共通を黙過するわけには行くまい。

時が方言を造るというごく普通の想像は、命名の本意が段々に忘れられやすく、忘れると新しいものに移りがちだという一点から見れば当たっている。しかし現存の古語にはいかなる語原家でも、こじ付けあたわざるものが多数なるにかかわらず、それは一種の符号となつて後生大事に守られているのである。そうして他の一方では分り切っている名称が、次々取替えられて来ているようである。即ち単語そのものにも特に異称を招きやすいものと、そうでないものがあるのではないか。もししかりとすれば、その理由を目的物の社会的地位、もつと具体化して言えば人とその物との関係如何に求めて見るのが順序であろう。もちろん古くからある言葉ほど、変化の機会は多かつたわけだが、事によるとその変遷は後々のものでなく、最初から名前沢山に生れ付いていたのかも知れない。内容は正しく固有のものであつても、称呼はそれぞれの入用の時を以て始まり、それが一処一人の制定に基づかぬという点は、近世船舶載の商品なども異なる所はないはずである。

虎杖の方言歴史に関しては、幸いにして記録の徴証が存留する。『枕の草子』時代の京都語がイタドリであつたことは、かの『枕の草子』の、「杖無くてもありぬべき顔つきを」という奇警なる一文章によつて熟知せられる。それから遠く溯つて反正天皇紀の注記に、「多遅の花は今の虎杖の花也」とある虎杖も、この書の出来た時代には多分またイタドリ

であつたろうが、別になおタチもしくはタチヒという語は伝わっていたのである。方言は必ず転訛^{てんか}と解し、そうでなければ異民族語の混入と見ようとする人には、この系統を説明することが既に容易でない上に、これを右二つの史料に拠つて、単なる新陳代謝の例と認めることも事実が許さないのである。という理由は至つて簡明で、現在においてもイタドリとタチヒとは虎杖の日本語として弘い区域に行われ、過去少なくとも千数百年の間、時の影響を受けて変化してはいなかったからである。そうして仔細^{しさい}にその錯綜^{さくそう}の跡を検すれば、二語は久しく併存し、その択一は単なる小区域の流行であつたことが知れるからである。即ち将来闡明^{せんめい}せられねばならぬある法則によつて、方言はいわゆる古典の時代から、著々として発生しつつあつたことが推測し得られるのである。

理由ある新語作製

記録保存の意味において、煩わしいけれどもやや多数の実例を挙げて置きたい。先ず^{まず}イタドリについていうならば、その北方の限界は越後であり、南端は土佐の海に及んで、中間にタチヒの領域を包み、九州には僅^{わず}かなる浸潤^{しんじゆん}の痕を見るのみである。関東平原の

例はなお乏しいが、少なくとも武蔵にはもうこの名は知られている。

イタンドリ

武蔵秩父郡 ちちぶ

イタンドリ

同 西多摩郡氷川 ひかわ

イタドリ

伊豆神津島 こうづ

イタンドリ

駿河梅ヶ島 するが

イタンドリ

遠江御前崎その他 とおとうみ おまえざき

イタンドリ

三河長篠等 ながしの

イタンドリ（エドズイコ）

信州諏訪以南 すわ

イタンドリ

飛騨吉城郡 ひだよしき

エダドル（エダロベ）

越中上川郡 かみにいかわ

イタンドリ

志摩船越

イッタンドリ

伊賀比自岐 ひじき

イッタンドリ（スカンポ）

大和月ヶ瀬 やまと

イタズロ（ゴンパチ）

同 吉野北山

イッタンドリ

山城伏見

イッタンドリ（イタイトリ） 丹波ふくちやま福知山その他

エッタンドリ 同 多紀郡たき

エタンドリ 播磨はりま加東郡かとう

イタズリ 淡路沼島

イタズリ（イタンポ） 阿波いちょう一宇その他

イタンドリ 周防すおう田島

イタンドリ 石見いわみなか那賀郡

イタイドリ 同 太田町

イタズリ（スイジ） 伊予いまより今治市

イタズル（イタンポ） 同 喜多郡

イタズリ 土佐はた幡多郡

イタズリ 同 沖ノ島

イタドイ 薩摩さつま長島

以上の区域外にもイタドリといつて通ずる土地はなお弘いが、それが在来ざいらいの語か、はた
 新たなる 匡きやうせい正もとづに基くものかを、確かめ得ざる場合が多い。信州北部などはこれに反し

て、幾分著しい転訛があり、また何とかしてこれを解しやすい語に、改めようとする傾向は他の地方にも見られる。実際むつかしい名前には相違ないのである。

イタンドロ（イタンダラ） 信濃東筑摩 ひがしちくま

イタンドコロ 同 松本市

イタコン 同 小 ちいさがた 郡一部

イタズイコ 同 下 しもみのち 水内郡等

イッタンダラケ 飛騨高山

エツタスイスイ おうみ 近江一部

エツタノゾウリ（スカンポ） 大和五位堂 ごいどう

イタロウ 石見波子 はし

これ以外に特に注意するのは、阿波 あわ の山村や伊予・土佐の各地に、これをイタンポまたはイタンポという例の多いことである。信州の下水内郡のイタズイコなども、スイコは東京でいうスツパグサ即ち酸模 すいば のことであるらしいから、イタドリ イタドリ のイタは元来独立して、この植物を意味していたのかも知れぬ。イタンポの後半はスカンポなども同じように、もと小児の間に行われた一種の愛称らしい。虎杖をスカンポと呼ぶ区域も相応に広く、北は

越後東は上総、西は瀬戸内海の沿岸に及んでいる。京都郊外の村でスツポン、佐渡そとの外か海い府ふでスツポンポンまたはポンポンスイカ、豊前ぶぜんの宇佐郡うさでもスツポンポンというのを見ると、山でこの植物を折取る時の興味が、スカンポという語の人望を助けたかと思うが、それは必ずしも最初からの意味ではなかったようで、上総・下総などで単にスカンポというのは、本来はスカナ即ち酸模のことであつた。

少なくともスカンポのスカは酸いということで、人は先ず里近くに多いスカナからこれを経験し、後に山中の同類にまでその名を推おし及およぼしたのであつた。多分は近世になつての改称であろうか。信州下水内郡のイタズイコなどは、ほぼその変化の過程を推測せしめる。これ以外になお同じ地方には次のような類例がある。

ヤマズイコ	信濃下水内郡等
ウマズイコ	同 更 さら 級 しな 郡
ボウズイコ	同 埴 は 科 にしな 郡
タカズイコ	同 北 きた 佐 さ 久 く 郡
キズイコ	同上
オイランスイコ（スイコンボウ）	同 南佐久郡

カラスツパ

同 北安曇郡きたあづみ

これ等はことごとく命名の趣旨が自分にはわかる。即ちタカズイコは高いから、ウマズイコは馬であつて、やや大形のものにはよく用いられる。オイランスイコもまた同じ意味で、虎杖は確かにスイコ中の上じょうろう 藨である。それから山ズイコ、木ズイコ、棒ズイコは明白であるが、北安曇のカラスツパも同じく稗酸模で、この種の特徴が長大にして幹を存する点にあるからであろう。これと近いものに福島県石城郡いわきのタケスカナ、福井県大野郡また山口県阿武郡あぶのタケスイバなどがある。いずれも竹のような酸模ということ、元はそれぞれ何かという名があつたろうと思うのに、こうしてよく似た動機に基いて、新らしい方言を造っているのである。

旧語保存

虎杖を信州更級などでウマズイコ、上総の望陀もうだ方面でウシノスカツポというに対立して、自分の生地中部播磨では酸模をウシダンジと称し、ダンジは即ち虎杖のことであつた。ダンジはまた隣の村々ではダイジともいつている。そうして僅かな野を越えて加東という郡

に行けば、もうエツタンドリという語が行われているのであった。私は『枕の草子』を読んでいわゆる雅語のイタドリであることを知つて後、頗る自分たちの方言を恥ずるの感があつたが、近頃比較を重ねて見ると、ダンジは即ちタチヒであつて、古いことに掛けては遙かに他を凌ぐものがあつたのである。どうしてこの一區劃のみに、こういう古語が残つていたかはまだ謎であるが、山陰山陽は少なくとも三分の一、それから内海の幾つかの島と、対岸四国の一角までは確かに分布しており、更に不思議なことはその間を飛び飛びに、他の色々の方言の入交っているのである。地図を染めて見る代りにやや細かくその実例を挙げて置くが、

ダンジ

播磨神崎郡以西

ダイジ

同 加西郡

ダイジンバ

丹後中郡

ダケダンジ

同 竹野郡

ダンジ

但馬一部

ダンジ

因幡岩美郡

ダンジ

美作英田郡

タチナ

備中びつちゅう北木島きたぎ

タジンコ

備後深安郡びんごふかやす

タジナ（カンボン）

安芸賀茂郡あきかも

タシツパ

伊予西条

タシツポ（ゴーザ）

同 大保木おおふき

タジナ（ハアタナ）

同 弓削島ゆげ

なおずつと懸かけ離れて、伊勢の度わたらい会郡にもこれをタンバという土地がある。これ等の諸もろもろの例の中でも、タジナなどはこれを転訛てんしということさえ出来ぬ。野外で採取する食品をナと呼ぶことは、殊勝千万なる昔風であつて、とても近世人の思い付くべき名称でない。察するところこれ等の地方のみはむしろやや怠慢で、特にこの植物をもてはやして新名を案出しようとしなかったために、古いものが偶然に保存せられたのである。

そんならこのタチヒの領域に介在して、現在異を立てている方言はどうあるかというと、それにも二通りあつて必ずしも総すべてのものが、スカンポや竹スイコの如く、後に出来たとも認め難い。その中でも殊ことに自分が心をひかれるのは、次のような一系統の方言である。

サイジ

備前びぜん邑久おく郡

サイジンコ

美作とまた 苦田郡

サジツポ

備中川上郡

サシツポ

同 小田・浅口郡

サジツポウ（イタドリ）

出雲いずも 仁多郡『俚言集覧りげんしゅうらん』

の増補に、伊勢でも虎杖をサシツポというところがあるが、それはいずれの村

であり、また今も存するか否かを知らぬ。自分の調査では下野しもつけ 那須郡の伊川村などに、サジツポの例が飛んで存在する。それが必ずしも特殊の伝播でんぱでないことは、羽後うご 由利郡の

海岸でもサシボコ、それからなお東北一帯のサシドリがあつて、むしろ分布は他のいずれ

よりも弘いのである。

美作・備中のサイジまたはサイジンボは、恐らくは隣境のダイジとの婚こんごう合であろうと

思うが、これにも別になお一系統の尋ね得られるものがある。例えば

ハイタ

讃岐さぬき 豊島

ハイタ

伊予あい 安居島

ハアタナ（タジナ）

同 弓削島

ハエタネ

同 伯方はかた 島

ハイタナ（イタズリ） 安芸倉橋島

サイタナ 周防大島

これがことごとく虎杖の土地称呼であるということは、比較をして見ぬ人には信じ難いことかも知れぬが、一たび古人の歌詠の中にも現れたるサイタツマという不思議な語を思い起すならば、それはむしろ語音が時と共に、いかに移り変って行くかを示すべき好個の一例ということが出来る。サイタツマはあるいは単に若々しい春の草のことといい、また虎杖をいうとの口伝もあった。例の『和訓栞わくんのしおり』の増補語林には、「先たつ妻」の義であらうなどと説いている。つまり古人も確かなことは知らず、ただその言の葉の珍しさを興じたのである。そういう部分にはかえって作り事が少ないかと思う。故に自分などは以前ある田舎に、虎杖をサイタツマという例があつて、偶然にそれが京人に面白がられたとしても、少しも意外には考えぬのであるが、今の所ではまだ確かにそうであつたとも言われぬ。むしろこれから以後の新しい調査によつて、逆にこの語のかつて存在したことを、推定する方が早路のようである。

サイタツマは見た所複合の形で、かつその中にはイタドリのイタを含んでいる。しかし自分の想像では、果してこれが虎杖はたの方言なりとすれば、むしろタジナのタジという語に、

前と後とが附加したものでだろうと考える。単なる几^{きじょう}上の論としては、本来長かった語が分解して、タジまたはイタを生じたものと言い得るであろうが、それでは私たちの切に求めている変化の理由というものがなお一層不明になる。その上に次に述べるような他の地方の実際ともいよいよ喰いちがうのである。

国の両端の方言

日本の中央部、全版図の約半分の虎杖方言はこれで一先^{ひとま}ず分つたとして、他の半分を占める国の端々が、いかなる異同を示すかをこの次には考えて見る。それが自分には言語成長の歴史を辿^{たど}るべき、最初の手懸^てかりと信ぜられるからである。

この中でも九州の方面は比較的簡単で、稀^{まれ}にイタドリの浸潤を受けた以外、一二の異称の極めて限地的のものを交うるのみで、大体はサドという語を以^{もつ}て一貫している。

カワタケ

肥前^{ひぜん}南高来^{みなみたかき}郡

パツパ

対馬^{つしま}豊崎村

ギシギシ

筑前^{とばた}戸畑

カワタケ

豊後ぶんご東国ひがしくに東郡さき

サトガラ

同 速見郡はやみ

サド

同 保戸島ほと

サトガラ

同 玖珠郡くす

サド

肥後しもましき下益城郡やつしろ

サドガラ

同 八代郡

サド

同 球磨郡くま

サド

日向ひゅうが東西臼杵郡うすき

鹿児島県のみは現在はいタドリで、サドという語が知られておらぬ村が多いかと思う。サドガラのはらは恐らく稗であつて、この植物が成長してしまつて、茎になつて後の名であらうと思うのは、北の方にもそれと同じような例があるからである。

ギシギシという名はまた紀州の有田郡ありだなどにも飛び離れて存在する。これは虎杖の齒に当る感覚で、あれを愛食する者のあどけない形容のようである。この地方の今一つの方言には、熊野から大和の十津川とつかわまで掛けて、ゴンパチというのがあつて系統が不明である。吉野の北山でもゴンパチはいタズロと併存しているから、これもいたつて仮かり初そめなる流行

に始まるものと見てよからうと思う。

それからずっと離れて東北の諸県であるが、こちらは九州のサドと対立して、サシという語を以て一貫している。例は多いからただ要処だけを挙げて置くが、

サシトリ (スカツパ) 津軽

サシトリ (シカンコ) 下北佐井浜

サシトリ (スカンコ) 野辺地^{のへじ}

サシドリ 南部^{はちのへ}八戸

サシドリ 鹿角^{かつの}郡

サシドロ 南秋田郡

サセドリ (トゴエ) 同郡 男鹿^{おが}半島

サスドリ 羽後亀田

サスガラ 由利郡^{じねご}笹子

サシボコ 同郡 金ノ浦^{こうら}

サスドリ 同 田沢湖岸

サシドリ 同 雄勝^{おがち}郡

シカドリ

同 飽海郡飛島あくみ

この最終のシカドリは、前に見えるシカンコ・スカンコと共に、もと酸いという点から出たことが想像せられる。そうすればサシドリもまたイタドリと同様に、サシとドリとの複合であつて、そのサシは下野の那須、伊勢の一部などのサジツポ、備後のサジナ（『本草啓蒙』による）と一つであるはもちろん、なお九州のサドとも関係があるのかも知れぬ。次には南秋田の一部で聴いたトゴエである。土地では近頃北海道の方から、入つて来た語のように思っている者もあるが、それは少なくとも半分の誤りである。半分というのは他の一方に、別にこんな語の存立を許す下地のあることを心付かぬからである。同じ東北でもやや手前の方に来ると、他に今一種の名詞がより多く用いられている。

ドンガラ（ドンガメ） 岩代大江郡

ドンゴイガラ 陸前柴田郡

ドンゴロ 越後岩船郡

ドンゴロ 同 粟生島あわトントンガラ 同 信濃しなの下水内郡

『静岡県方言辞典』に、この県にもトトクサという区域があるというのは、事によるとこ

の系統かもしれない。北の方の境としては、羽後の横手町のドンガラランボ、同仙^{せんぼく}北郡横沢村でもドンガラである。ただし別になおサシドリがあつて、葉が出て後はサシドリといい、若いときをドンガラという^{おおまがり}と報告せられているが、同郡大曲ではサシドリまたはサシボツコは若芽、そうでない場合がドンガラだという。いずれか一方が思いちがいで、恐らくは大曲の方が正しいのではないかと思つてゐる。土地で確かめてもらえば、わけもなく知れることである故、この点はかの地方の篤志家に一任する。

中間地帯の混合

右のドンガラのがラがもし茎のことならば、前半のドンはその意味は不明ながら、とにかくイタドリ・サシドリのドリと元一つで、かつてドリとのみいつて虎杖を意味した時代が、あつたらしいことを想像せしめる。しからば後に至つてイタといいサシという語を、これに附加した動機もしくは原因は何であらうか。イタの方は現在においてはまだ何の端緒も得られぬが、他の一方のサシまたはサスはあるいは棒のことではなかつたらうか。この点に関しては他日更に細叙したいと思うが、棒は杵^{おこ}として肩に担ぐ風が盛んになる以前

から、常人の生活には必要の多いものであったが、これを表する古語は最早中央の標準語には残っていない。そうして東北地方のみにはサスという名があるのである。この虎杖の大きな特徴が、大竹に乏しい奥羽にあつて注意せられ、これを棒様のドリと呼ぶに至ったことは、竹ある方面でタケスカナ等の名が生じたのと、同じ事情と見ることが出来るようである。なおサスタケとサスマタとかいう語とも、考え合せて見るべきである。

ボウという名詞とても、後に木偏へんに奉の字を付与したというのみで、まさか支那語の借用ではあるまいと思う。私の意見が正しいならば、これはホコという語の分化であつた。

ホコもハタホコなどといって、本来刃ある武器に限られたものではない。関東一帯で小児等が弄もてあそぶ小形の棒をボクトといい、従つて木刀という漢字を当てようとするものは、他の地方でベエタ、バイタなどというと同様のもので、恐らくはまたこのホコから出ているのである。俗に独活うどの大木などという形ばかりいかめしくて弱いものを、栃木県あたりではイモガラボクトといつて嘲あざけつている。即ち芋茎のホコの如しという意味である。能登のとの石いするぎするぎ動山の麓ふもとの村では、虎杖をイタズリともいうがまたガラボコともいう。これから振りかえつて考えると、羽後飛鳥その他のサシボコも、命名の理由はいと明らかで、ただ一方いずれかを忘れて、趣旨が重複しているというに過ぎぬことは、別に多くの例を挙げたナン

バントウモロコシなども同じである。

こういう混淆こんこうが個々の方言領の境目に発生することは、単語の運命ともいふべきものであるが、自分の知る限かぎりにおいてはそういう入会地いりあいちは数多くあつて、いまだそれを重ね写しして一般的区劃くかくともいふべきものを、定めることが出来ぬのみである。

虎杖については自分の生国瀬戸内海の北岸なども一つの間接地帯であつた。ダイジはイタドリと入交り、他の一方にはサシの系統かと思うサイジンバ・サジナにも接して、なお新しいスカンポさえも併用せられる。他の一端では信州北部羽後の雄物川流域おもものなどにも、二系相剋そうちくの跡を留めている。太平洋側では陸中釜石かまいしの附近がその一例であるが、山本鹿洲君の報告では、ササドリ及びアオバという他に、なおボーボーガラとデンボーガラとの二つが数えられた。ただしこのボーボーを直ただちに今日の棒のことだと、断定してしまうのはまだ早い。という理由は東北一帯には、山野にこの植物が盛んに繁茂し、小児がその若芽を生食する以外他に色々の利用法があるからである。津軽などではあの枯れた茎の中に住む虫を取つて、魚釣の餌にもしているが、今一段と弘い用途は燃料である。囲炉裏いろりに親しみの薄い今日の人には、聴いても同感どうかんは起らぬかも知らぬが、燃料の種類殊ことにその燃え方によつて、名を付けた例は元は多かつた。馬酔木あしびをベリベリ柴と呼び、松毬まつかきをチチ

リという類は、始^{はじめ}は幼い者を喜ばせるためとしても、今は既に親々の方言になつてゐる。故に虎杖のボーボーガウなども、同じく燃える姿からこんな名をなるほどという人が、次第に多くなつたのかも知れぬ。紀州の日高郡のある村ではホボロダケという名前もある。しかしそのために虎杖をホコといった前例と、全然没交渉とまでは言い切るに及ばぬ。玉^と蜀黍^{うもろこし}のマメキビを作つたように、甲あるがために乙の方言が殊に採用しやすかつたという場合は多いのである。福島県石川郡には、虎杖をテテポーポーという例があると報ぜられる。もしそれが誤解でないならば、やはり一方鳩の啼^{なき}声^{こゑ}などがあるために、少しく転訛してこんな名になつたのである。岩手秋田の田舎ではテテポーポーは蒲公英^{たんぽぽ}のことであるが、これとても変化の過程は同じで、もし鼓の音のタンポポや、鳩のテテポーポーがなかつたならば、蒲公英をこう呼ぶわけがないのである。同じ事情から鼓^{みづすまし}虫のマイマイコンゴウが、小児のキリキリマイの遊戲と名を一つにし、土筆のツクツクボウシは、寒蟬の啼声と共通の名を持つてゐる。土筆は殊に少年の支配に服してゐたためか、こういう二つの原因を気軽に調合した例が至つて多い。そうしてその経路が虎杖よりはもつと明^{あき}かに、尋ねて行かれるように思われるのである。

複合形と語義

土筆を表示する日本の方言は、今日もまだ増加して行こうとしているが、主要なる系統は大略四つであつて、その發生の順序の明らかにし難いこともよく虎杖と似ている。相違はただこちらは全体に命名の必要が遅く始まつたと見えて、その趣意が大よそ察せられ、従うてその相互影響交雜の跡が、幾分か簡単に指示し得るという点にある。

先ず最初には標準語として承認せられているツクシであるが、これはやや古く文学語として用いられていたというのみで、現実の領分は決して廣大でない。東京などですら子供はツクシンボといい、京都近くでもツクツクシまたはツクツクと呼んでいる。こうなると既に複合形で、純なる元の姿でない故に、これから直接には語義を問うことが出来ぬのである。ツクシは自分の推定では、みおつくし 標のツクシであつて、突立つた柱を意味する。こんな微物に向つて、通例は重々しく考えられる標ひょうぼく 木の名を転用したところに、もう最初からの軽い戯れがあると思う。関東以北においては特に設けられたる境の標示ほうじのみならず、天然の生木にもツクシの名を与え、更に進んではやや尖とがつたる山の峰の、特に目標となるものを大ツクシ小ツクシなどという例が多い。過大過小の差はあるが、転用という一

事は土筆のツクシも同じである。

ツクツクまたはツクツクシに至つては、たとい「つくつくと立っている」という心持が加わつたにしても、前にツクシという語が先ず存在しなかつたらば、直接には発生する語ではなかつたと思う。それにもかかわらずこれとよく似た語の随分ずいぶんと弘く行われているのには、單なる口拍子以上に、今一つ大切な原因があつたからである。

ツクツクシ
撰津田辺町せつつ

ツクシ（ツク）
尾張西春日井郡

ツンツクシ
遠江浜名郡

ツクシ
同 森町

ツクツクシ（ツクシ）
佐渡外海府

ツクツクス
盛岡市

この通り多くの例は、いずれも殊ことさら更にツクの音を濁っている。これは自分にとっては無意味な訛謬かびゆうとは思われぬ。即ち単に「突く衝石つくし」という以外に、更に第二の系統に属する「続つぐ」という趣旨が添加していたからだと信ずる。多くの読者はあるいは自分の郷里ばかりの一些事さじなりと考えられるか知らぬが、小児が土筆を袴はかまの部分から二つに折って、

そつと元の通りに挿^さして置いて、どこで続^ついだか^かを中^あてさせる遊戯は、古いと見えて殆^{ほとん}ど全国に行われている。そのためには唄もありまた唱えごともあったので、ツクツクは即ちその常用の語として発育したらしいのである。この事を知るには今少しく精細なる比較が入用である。

ツクツク

津軽

ツクツク

陸中釜石

ツクツク

陸前氣仙沼^{けせんぬま}

ツギノコ

陸中平泉

ツギグサ

仙台附近

ツギナンボ

野州北部^{やしゅう}

ツゲノコ

下総猿島郡^{しもうさしま}

ツツンギノコ

上野邑楽郡^{こうずけおうち}

ツギツギ

越後柏崎^{かしわざき}辺

ドコドコ

同西頸城郡^{にしくびき}

モトモト

越中某地

ドコドコグサ

加賀能美郡の

ツギツギグサ

紀州那賀郡な

ツギマツ

土佐

加賀では別にヘビノロウソク、もしくはろうそくぐさ蠟燭草という名があるのに、これをドコドコ草というのは、次のような童謡があるからである。

どこどこ継いだどこ続いだ

あたまの天井まで皆ついだ

越後の姫川流域のドコドコにも、

どこどこどこから続いだ

という言葉があり、紀州の有田郡でも

つぎつぎぐさどこ続いだ

というそうである。即ちツクシという語は由緒正しくとも、これ一つからツクツクという名は成長しなかった。誤りにもせよ確かなる根拠はあった。そうしてイズコ（何処）をドコというようになったのは近世だとすれば、その頃以前の世の小児遊戯にも、なおその中間の同じ類の語があったことが知れる。

語義の推移と感化

同じ「どこどこ続いだ」の遊戯も、土地によつて土筆即ち花^{かけい}茎^{もつ}を以て行ふところもあれば、また杉^{すぎ}菜^な即ち葉^{よう}茎^{けい}を以てするところもあった。紀州有田郡のツギツギグサなどは杉菜であり、土佐でツギマツというものも杉菜を意味し、土筆はこれをツギノコといえは杉菜の方が前らしい。常^{ひたら}陸^な那^か珂^か郡の山村ではツギノコといえは杉菜を意味し、土筆はこれをツギノコノハナと呼んでいる。能登の鹿^か島^{しま}郡でスギナノト、越中上^か新^{しん}川^{かわ}郡ではスギナノト、コトは^ふ路^きなどの^と臺^{とう}のことだから、これも杉菜の方を主にしたのである。それから考へて行くと、杉菜はなるほど適切なしかも佳^よい名ではあるが、似よつた針葉樹も色々ある中に、特にスギという名が弘く行われたのは、やはりまた「継ぎ継ぎ」の遊戯が、この音を耳に親しからしめた結果ではなからうか。

その杉菜の方言を調べて見ると、土佐のツギマツという以外に、松にたとえたものも二三ある。例えば

マツナ

肥前南高来^{みなみたかき}郡

マツナ

筑前

マツブキ

播磨

この二つは『本草啓蒙』に出ている。今も果してそういうかどうかを知らない。その他

スギナ

遠江竜川村

シギナ

越後粟生島

スイナ

陸中種^{たねいち}市

スギグサ

陸前田代島

ツギグサ

岩代伊達郡

ツギナ

新潟県一部

などが皆杉菜の方言である。越後には草をツギナ、花茎をツギツギという土地があるので
はなかるうか。尋ねて確^{たしか}めて見たいものと思っている。

とにかく特にツギナという語の発生しやすかった事情はあるので、仮に杉菜という方
言が独立に始まったとしても、これもツギツギがツクシと連携したように、久しからずし
て二種の趣旨を混同することになったかと思う。久しく実地を省みなかった人たちには、
あるいは信じにくい話であるかも知らぬが、同様の例は広く搜索するまでもなく、土筆一

つについてもなおたやすく次のものを挙げることが出来る。たとえば私の郷里の播磨神崎郡では、杉菜をオスギといい、土筆をホウシといい、そうして次のような童詞があった。

お杉だれの子、ほうしの子

ほうしだれの子、お杉の子

なるほど天然の小觀察者にとつては、この兩人の關係は竹と筍たけのことの間柄よりも更に神秘であつた。それ故にこそ卵にわとりと雞との昔話、ないしはナルシツソスの神話にも比ぶべきこんな謎の歌を、いつの頃からともなく春来るごとに、野に出でて唱えていたのである。しこうしてお杉には杉菜、継菜という元の形があつたと同じく、ホウシもまた必ずしもお杉の後に生れるものでなかつた。あのすつぺりとしたやや尖つた頭に、何枚かの衣をぬくぬくと著きて出る姿は、お杉がいなくともなお法師であつた。日本には僧侶の総称をホウシという俗用の他に、どこか形のこれと似て一かさ小さい者を、転用によってホウシといった時代があつた。『狂言記』ではカナホウシが幼児の名ときまっていたのみならず、吉法師だの三法師だのという童名はあの頃は珍しくなかつた。

さてそのホウシを土筆に付与したのは、果して本来の僧侶の意味でか、あるいはまた子供という心持で命名したのかは問題であるが、いずれにしても後には双方に通わしていた

ことは、前に挙げた童詞が明白にこれを立証する。即ちこれもまた名が定まって心が更に改まった例である。ホウシという方言の区域は相応に弘い。

ホウシコ

播磨^{しそ}宍粟郡

ホウシ

美作^{くめ}久米郡等

ホウシ

備中^{じょうぼう}上房郡等

ホウシ

但馬

ホウシ

鳥取県約一円

ホウシサン

出雲^{みほのせき}美保関

ホシサン、ホーシ

同 松江市

ホシコ

石見太田町

ホウシ

備後^{ふかやす}深安・沼限^{ぬまくま}

ホウシ

安芸賀茂郡

ホウシコ

同 大崎下島

ホウシヤヨミノコ

同 倉橋島

ホウシヤ

周防大島群島

ホウシコ

讃岐高松その他

ホウシコ

伊予松山・西条等

この中で安芸の倉橋島のホウシヤヨミノコは、お杉と関係なしに同種の唄のあつた証拠であり、周防太島のホウシヤもまたその痕跡と認められる。ホウシコというのも恐らくは土筆を幼童に譬^{たと}えた例と思うが、なお自分としてはこの方言の起りは狂言のカナホウシ時代よりも古く、やはり本物の法師と似た所から、直接に持つて来た語であろうと思う。その証拠としてよいのは、同じ系統に属する次のような方言である。

ゴボウ

上総望陀^{もうだ}地方

ホトケンボウ

常陸稲敷^{いなしき}郡

ボウス

加賀河北^{かほく}郡

デンボウシ

備前下津井^{しもついで}

ヒガンボウス

安芸佐伯^{さえき}郡

ヒガンボウス

周防玖珂^{くが}郡

ヒガンボウ

石見大森

ヒガンボウス

同 那賀^{なか}・鹿足^{かのあし}郡

ヒガンボウス

ながとあぶ
長門阿武郡

ヒガンボ

伊予喜多郡

ヒガンボシ

同 北宇和郡九島

ヒガンボウス

はた
土佐幡多郡

ヒガンムウス

同 安芸郡

ヒガンボウス

ぶぜん
豊前一部

ヒガンボウス

あそおぐに
肥後阿蘇小国

ヒガンボイボイ

日向宮崎郡

即ち飛び離れた東国の例は別にして、ホウシ区域は西隣では一様に、春の彼岸にもてはやされる法師になぞらえて、随分と気の利いた可笑味おかしみのある方言を採用しているのである。この中でも石見の浜田方面には、

彼岸坊主は誰の子

すぎなのかかあのおとむすこ

という童詞があつて、言葉は變つても心持だけは、こんな遠くまでも走り廻っているのである。

隔地共通の例

ここまで進んで来ると、東京附近や信州などのツクシンボが、二つの方言の複合であることは、最早^{もはや}討論を要せぬと思う。しかもその例は決してある小地域に限られておらず、これも西は九州の端々と、東は奥州の各地とに、看過すべからざる共通を見出すのである。

ツクボ

筑前戸畑^{とばた}辺

ツクボウ

筑後三潯^{みずま}郡

ツクボンサン

同 柳河^{やながわ}

ツクボウ

佐賀県一部

ツクボウ

対馬豆^{つつ}酸

ツクボウ

豊後日田^{ひた}郡

ツクボウシ

肥後鹿本^{かもと}郡

ツキボシ

同 玉名^{たまな}・宇土^{うと}等

ツクボシ

同 下益城郡

これと最もよく似た例は先ず中部日本において見出される

ツクボ

美濃みの養老ようろう郡

ツクボウ

同 根尾谷

ツキボ

越前大野郡

ツクンボ、ツクボシ

三河額田ぬかた郡

ツクンボウシ

同 宝飯ほい郡

ツクンボ

遠江袋井その他

ツクボウシ

信濃下伊那郡

ツクンボ―シ

同 諏訪郡

即ち何でもない差別のようだが、ボウまたはホウシという語の、附加したものにも劃かく然んたる領域があつて、互いに入交つてはおらぬのを見ると、土筆を見て法師の姿を聯想れんそうする習わしは、少なくとも近畿その他のツクシ・ツクツク区域等には、行われていなかったと同時に、ツクシンボというが如き単なる一音節の添加にも、なおそれ相應の意識のあつたことは認められる。前田林外君の『民謡全集続篇』に、東京府下の子供唄として、次のような一つが挙げてある。

つくしんぼうやどうしんぼう

彼岸の入りには袴はいて出やれ

即ちヒガンボウズという方言の領分から、これだけ隔絶した東国の果^{はて}においてさえも、小児はなお土筆を坊主として待遇することを忘れなかったのである。

忘れなかったということは、当然に「いつ覚えたか」及び「どうして学んだか」の問題を連れて来る。春の彼岸の頃に里に現れるツクツクボウシと、夏もやや終^{おわり}に傾いてから庭の樹に来て啼く蟬の声とを、一つの言葉で呼ぶということは、驚くべき無頓著^{むとんちやく}には相違ないが、とにかくに誤解と称すべきものではない。二つの地方語の間には明らかに関係があり、しかもいずれか一方が正しく他方はこれを濫用したのではないばかりか、むしろ相手がなかったら双方とも、こういう変化は見なかったかも知れぬのである。土筆のツクツクボウシは既に九州に始まり、北は奥州の一端に及んで、その隣のヅクボウと聯絡^{れんらく}を保っている。

ツクツクボウズ

豊前宇佐郡

ツクツクボウシ

大和一部

ツクツクボウシ

紀伊有田郡

ツクツクボウ

同 南牟婁郡 みなみむろ

ツクツクボウシ

伊勢山田等

ツクツクボウシ

おうみはちまん 近江八幡等

チククチクボン

同 仰木村 おうぎ

チクチクボウス

飛騨吉城郡 よしぎ

ツクツンボ

能登珠洲郡 すず

ツキツツボ

越後一部

ヅヅボウシ

静岡県一部

ツウツンボ

安房千歳村 あわちとせ

ツクツクボウ

磐城石城郡 いわき いわき

即ちツクツクまたはツギツギという在来の語に、坊主の擬人観を添えれば直ぐに出来る方言で、これだけ見ると蟬の声は比較的自由だから、小児がこれを聴いて春の土筆の名を貸したとも考えられるが、實際は寒蟬のツクツクホウシは五百年前の文学に現れ、今日も標準語として認められているのみならず、昔からほぼこれに近い啼声をするものとなっていたのである。こんなついででもないとその記録も遺し得られぬから、退屈凌ぎにその例

を並べて見ると、古い所では『蜻蛉日記』にクツクツボウシ、『散木奇詞集』にはウツクシヨシと鳴くとある。近世の口碑こうひにおいては筑紫つくしの人旅に死し、その靈化して蟬となつてツクシコイシと啼くと、也有やゆうの「百虫賦ひやくちゆうふ」にはあるそうな。その筑紫方面の聴き様もそれと近く、いずれも寒蟬を

ツクツクホウシ

肥前一部

ツクツクツシヨウ

同上

ツクツシヨウ

肥後各郡

ツクンビヨウシ

近江神崎郡

チユクチユクオイシ

同 仰木村

ツクツクシ

加賀金沢

ツクツクエンヨウシ

越後一部

カタカタキンヨウス

同上

コチヨコチヨキーヨウス

同 西蒲原にしかんばら

ツクツクヨウス

仙台

ツクンヨン

下野河内郡

ゴトゴトゴイシ

常陸稻敷郡

キタカタゴンズ

下総きたそうま北相馬郡

ホウセンツクツク

上総夷隅郡いすみ

ホウエンツクツク

同 長生郡等ちようせい

などといっている。自分も少年の日に下総北相馬郡にいて、右のキタカタゴンズを聴いた。何か隣の北方という村に、むかしごんすけ権助とでもいう男がいたのではないかと思っていた。最後のホウエンツクツクも法師のことであろうから、とにかくに坊主の聯想は蟬のツクツクの方にも、早くからあったのである。播州ばんしゅう印南郡いんなみの土筆採りの童詞として、郡誌には次のような唄が載せてある。

つくつく法師出やらんか

親はないか子はないか

たった一人の娘の子

なこどに取られて泣きなさる……

これは手てまりうた毬唄などになって今も諸国に弘く行わるるもので、本来は雉子きじの歌であつた。

山のけんけん雉きじや何を泣くね

親がないか子がないか

親もあるが子もあるが

たつた一人の男の子

鷹匠たかしょうに捕られてきよう七日

七日と思うたら十五日……

というのであつたが、土地によつてはげんげの花といい、更に転じては「つくつくぼんさん何泣くね」とも歌つていた。それが寒蟬の哀話からまた移つて、土筆を見つける際の呪文のようにまでなつたのである。これを要するに多くの言語は、興味きょうみがこれを培養ばいようして次々に今の形まで成長せしめたので、その久しい前後の伝記を切離きりはなし、単なる一時代の横断面のみを以て、その本質を説こうとするは心得もつ違いなことではなければならぬ。

方言区域の論

またまた話が長くなつたから、もう一隅の残つた部分だけを記述して、自分の結論に急ぎたいと思う。東北地方の土筆も太平洋側の半面には、前に引例した如くごと自分のいう第一

第二の系統、即ちツクシとツギツギとの交錯に止ま^{とど}まっているらしいが、他の半面の日本海側にはまたやや異様なる変化が認められる。

ツクベ
秋田市

ツクベ（ボウス）
南秋田郡

チツクビ
仙北^{せんほく}郡横沢

ツツクベ
同 大曲等

ツクンベ
河辺郡

チクベ
由利郡亀田町

ツクベ
同 笹子^{しねご}村

グウツベ
鮎^{あぐみ}海郡本^{もとたて}楯村

山形県下は大体にほぼ中央部と一致している。さてこのツクベが単なるツクボウの音訛であるか、はたまた新種の協定にして、更に第五の系統を暗示するものであるかは、容易には決し兼ねる。そういう理由は今までに列挙した以外に、なお幾つかの興味ある新称呼が、殊^{こと}にこの方面に多くかつ成長しつつあるからである。讃岐や豊後の一角に存在するタウナまたはトウナ、越中高岡辺のゾンベラコウの如き異例は除き、他のやや普遍的なる方

言は一つには筆にたとえたもの、

フデクサ（ツクツク） 大和十津川

フデバナ 信濃北佐久

キツネノフデ 越後東蒲原

フデノホコ 奥州野辺地のへじ

二つには蠟燭ろうそくにたとえたもの、

ヘビノロウソク 加賀能美郡ののみ

キツネロウソク 能登鹿島郡

キツネノロウソク 越中入善にゅうぜん

筆も蠟燭も田舎に知られたのは古いことでないから、この名を使い始めた人々は恐らくは在来のもを見棄てたのである。第二種は少しばかり説明に困るが、先ず次まのようなものである。

イノノチンボ 信州一部

ネコノチヨンボ 越後三川村など

ンマノスツコ 羽後由利郡

ダンベコ

北秋田小阿仁こあに

ツヅコ

鹿角郡

ヂコババ

津輕小泊こじまり

ヂヂババ

下北佐井浜

ヂヂババは通例男女というまでの意味で、これも以前には田舎の子供たちが、無邪気な笑わらいの料に用いたことがあった。ツクベの起りは仮に継ぎ継ぎであっても、あるいは童詞などの関係から、特に下品な音を添える必要があったかも知れぬのである。

私は地方語變化の主要なる原因として、個々の客体の社会上の地位、即ち人との關係を算かぞうべきことを信じているが、それはもちろんその物の重要さを意味するのでない。むしろ正反対に生活の交渉がやや浅く、軽い利害を以て表現の不一致を眺めることの出来る場合に、たとえ隱語の如くわざわざの相異を企てぬまでも、自然に形が改まって若干の不審を招き、解釈に僅わずかずつの智力を要することを辛抱しんぼうしまたは歡迎したかと思っている。そういう余裕の多い者が何人なんびとであるかはわかつている。無造作率直と少しも苦しまない技巧とは、特に少年たちの参与に基づいて、方言の一つの特色となったのである。ただし新渡の農作物、もしくは山野の採取物においても、時の経過と共に遠方への商品となった

り、またある期間の前後を考えられることになる、用語はそのように浮気であつてはならぬ。故に追々^{ゆえ おいおい}に各地に固定するのみならず、また力めて大勢^{つと}に迎合^{げいこう}せんとするのである。別の言葉でいえば方言の分布には、その本然の約束というべきものよりも、かえつて社会的原因が多く働いているわけで、従つて特殊性に富みたる民族の経歴^{ほか}を外^{ほか}にして、いつの時代にも言語の類似から、大古の親類関係が考えられると思うのは誤謬^{ごびゅう}である。

いわゆる方言区域は本篇のような調査を重ねて行くうちには、結局は何人も争い得ざるものが劃定^{かくてい}せられることと思うが、それは要するに昭和三年以後の方言区域であつて、百年五百年前の異なる文化の下に、同じ分野が現れていたという証拠は、また別に求めなければならぬのである。人は往々にして大体といふ僅かなる例外といわんと欲するが、いかに小さな例外でも原因はあるべきで、その原因は即ち過去の異なつた交錯にあり、むしろある時代の方言区域の、今とは大に異なつていたことを示すものかも知れぬのである。そうすると時代時代の輪^{しりん}ちがいになつた方言区域を、骨折つて跡付けることも張合いのない話のようであるが、四隣^{しりん}の異同を詳しく究めた上でないと、地方的変化の法則を知ることが出来ず、地方と時とがどれだけの影響を与えるかを測量しないでは、言語の成長を説く方法がないのである。その上に各時代を貫通した傾向の如きものは必ず分つて来る。

例えば距離が變化を顯著にすることなどは、仮にまだ理論の満足にこれを説明し得るものがなくとも、次第に実験を積み重ねる疑^{うたが}の余地がなくなるはずである。ただこれに関^{かん}聯^{れん}して自分の考えて見たいと思つてゐるのは、言語には發生の大小の中心地があつて、右の距離は是非^{ぜひ}ともその中心から測るべきものではないかということである。東北と九州とは互いの距離は最も大きいが、單語の近似は決してここに挙げた虎杖や土筆のみでない。これも昔の京都とその周囲の地とが、一つの強力なる中心地であつたためではないかということである。故にもし果して言語の伝播にも、周圍波動の法則が存立し得^{うる}とするならば、少なくとも一本の堺線を以て、国を南北に二分するの案は危険である。

堇の方言など

一

諸君 蒐^{しゅう}集^{しゅう}の民謡はいつも大なる興味を以^もつて拝見してはいますが、その中には今も
う歌わ^わないもの、ある老人が僅^{わず}かに記憶していたもの、意味の不明で誤写だろうかと思
うものなどがあつて、地上楽園も時としては枯野をあるくような感じがします。

無理もないことながら、この半世紀の間に、非常に多くの歌が亡^{ほろ}びたようであります。
それでも以前は忘れた人と、新たに歌い出す人と同じであつたために、知らず識^しらずの
間に心持を相続していたような痕^{こん}跡^{せき}がありますが、これから亡びるものは永久に、また
根^みこそげなくなるのです。そうかと言つて人為を以て保存するのはつまりません。ただ
つと見てゐるの他はないと思います。

以前の日本は歌に満ちたる国であつたようです。中世の終^{おわり}頃から、それが四句二十六字の小唄に統一せられ、夙^{はや}くその大部分を喪失したことは、一方には保存せられる民謡の言葉が存外に新しいことにより、他の一方には神社の祭式の中に少し残り、もしくは童女の手毬^{てまり}歌などに、散乱して伝わっている古いあや言葉から、推測し得られるのであります。

児童の前代生活を保存してくれた功勞は没すべからざるものがあります。今では殻ばかりになつた村々の口碑^{こうひ}の類が、かつては美しい辞句と旋律とを以て彩色せられ、深い感動を傾聴者に与えていたらしいことは、たとえ無意識の片言まじりにもせよ、子供が繰返していてくれた色々の歌から、僅かに認めることが出来るのであります。

私は昨年あたりから、人の笑うような苦勞な方法を尽して、この方面から文学のなかつた時代の文芸を尋ねて見ようとしております。その間に新たに得た経験は、新奇を好む点では何^{なんびと}人よりも熱心な子供たちが、実は意外な保守党であつたということでありました。

その理由は考えて見れば何でもないのです。「おつむてんてん」などの簡単な遊戲から、「子買お子買お」の如^{ごと}き込^こみ入^いつた演劇に至るまで、一つの行事に一人の児童の携わるのは、

精々^{せいぜい}一年か二年であります。前の子供にはもう珍しくなくとも次の子供には新奇です。一生懸命になつて模倣をして、ほどなくこれを弟妹に引継ぐので、彼等はいつまでも留學生の如き感受性を以て、古い古臭い遊戯を学ぶのであります。そうしてまた教える側でも特に計画ある幼稚園でもない限り、いつも手近い仕来り^{しきた}をそのまま利用しますから、偶然に一種の駅伝競走の如く、大昔との聯絡^{れんらく}を見るのであります。

二

それから今一つ、平穩無事なる村の生活に老いて行く人々は、子が生れると再び子の心に復り^{かえ}、孫が出来ると自分が孫であつた頃の、感覚を喚び起されるのであります。殊に^{こと}子供の相手は年寄^{としより}ときまつていまして、その間にはまた大きな鍵^{くさり}が繋が^{つな}つて行くのであります。

この意味からして私は、童児の持つている日本語を珍重します。農夫の骨折な日々の生活では、とても静かに觀察している余裕もない天然の事物を、門に立つて老人と幼い者とは、いつまでも噂^{うわさ}したのであります。子供が学ぶ新しい物の名は、大抵^{たいてい}は祖父が小さい

時に教えられて、そのまま蔵^{しま}つて置いた古い智識でした。特に小学読本の如く子供のために編纂^{へんさん}したものではありませんのです。またそんな訂正をする必要は、今までは少しもありませんでした。現在の少年はこれに反して、恐らく孫を見るまでには、一切の幼い時に得たものを、改革してしまつていくでしょう。

十年ほど前に紀州のある教師が、児童の持つてゐる童話を蒐集して見たことがあります。それを見てみると半分は土地の昔話、残り半分は巖谷小波君^{いわやさぎなみ}、久留島武彦君^{くるしまたけひこ}などの本から読んだものの不精確なる記憶でありました。即ち是非^{すなわぜひ}とも確実なる話をしなければならぬとも、思つていない若いおばあさんやおつかさんは、胸に浮んで来る順序に、知つてゐるだけの話をしたので、いわゆる教育が伝統の敵であることは、最も顕著にこういう善でも悪でもないものの上に現れるのであります。

しかも今日はもう歴史を学ばんとする者が、既に資料の欠乏に苦しみ始めているのであります。例えば還^{かえ}つて村の老翁の一人に聞くならば、何でもなく説明してくれるような事柄のために、図書館中を駆けずりまわるのであります。外国の参考書は料理^{りょうり}がしてあるが、日本の資料はなまである。時としては自ら出て行つて採取しなければならぬのに、問うすべも知らず、いわんや快く語らせるだけの親しさを持ちませんでした。今に大いに不自由

を感じずに違いないと思っています。

ところが我々の友人の中には、別にこれという入用はなくして、単にあった物のなくなるのを愛惜するという情だけから、何となく手帳をつけているような人がかなりあります。個々の家庭に必ずある年寄と子供が、朝から晩まで聯絡れんらくを保つていても、消えるものはやはり消えてしまいました。それに比べると遙はるかに無力なるこんな記録が、果はたして落ち散った鏈を再び繋ぎ合せることになるかどうか。随ずいぶん分心細い話ではありますが、幸いにして古人の聊いささかも味い得なかつた幸福が一つあります。即ち一時に全国の隅々にあるものを、比べて考えて見るという便宜であります。

民謡なども諸君のような企てによつて、今更何事いまさらをか語ろうとしているのであります。私は日本の民間文芸の最後の伝承者、即ち既に老いまたは老いんとする昔の児童をして、今一度相会してかつて感受したものを説かしめたいと思うのであります。そうして単なる冷ひやかな批判者としてではなく、出来るならば少しでも感激の相あいづ槌ちを以て、彼等に力附けたいとも思うのであります。

そこで差^{さしあ}当^{あた}つて自分が分担している方面、即ち物の名の附け方と小児の生活、それから歌というものがどういう風にして口ずさまれるかなどの問題を、雑然としてお話して見ようかと思ひます。涼しい樹の蔭などがあるならば、立ち止まつて暫^{しば}らくこの顧みられなかつた旧事を考えて見て下さい。

私は董^{すみれ}という草の地方の名称を比べて見ました。この植物の命名法は、全国を通じて先^まず三種類に分れております。それは最初から三通りあつたわけではなく、多分ある年代を隔てて順次に出来たのが、採用されたりされなかつたり、したものだと思ひます。その中で一番古いのはもちろんスミレでありましたが、古いだけにどうしてそう名づけられたかわかりません。しかし今に知れることと思ひます。

第二にはあの紫の花の形を、駒^{こま}の顔に見立てた命名であります。この微小なる花に、あの大きな馬の顔をもつて来て比べることは、小児の想像力でなければ出来ぬことです。『本草啓蒙』に採集してあるのは、

トノウマ

薩摩

コマヒキグサ

筑後

キヨウノウマトトノウマ

筑前

などですが、今もそう言うかどうかわかりません。

近頃になって知ったのは、

ウシンコツコ、ウンマンコツコ

薩摩

チンチノコマ

駿河 すんとう 駿東郡

ベコノツノツキ

羽後秋田郡

などです。ベコとは牛のこと、チンチは何のことか知りません。ウシンコツコのコツコもまだ分りませんが、とにかくこれだけの方言からでも、二つの花を持って闘わせていたことが想像せられます。トトノウマなども「殿の馬」で、京の馬と二つを対抗せしめたものかと思えます。

第三種の命名法は即ち角力 すもうとりぐさ 取草の系統であります。

カゲピコ

秋田市

カギヒツパリ

羽後 せんぼく 仙北郡

カゲヒキ

陸前 とめ 登米郡

カギトリバナ

仙台

カギヒキバナ

同上

アゴカキバナ

越後

ヒツカケ

同 西蒲原

カギバナ

讃岐・伊予

カギというのは疑うたがいもなくこの花の馬のあごに譬たとえられた部分で、現に私たちもこれを引掛け合つて、首のむしれた方を負まけとして角力を取らせたものであります。

角力取草という名は車前おおばこその他色々の草に付与せられていますが、葦をそう呼ぶ地方が一番に広い。京大阪を中心として、北陸関東から磐城いわきの一部まで、西南は中国四国にも及んでいます。即ちどうして学んだかこの遊戯が、これだけの間に行われていたのであります。関東の方では大抵スモウトリバナというのは、恐らくは別になお相撲を取らせる草もあつたからでしょう。

四

次に珍めずらしい葦の異名は、三河の宝飯郡ほいなどでタロンボージロンボーというので、これ

は俳人等が早くから注意して、太郎坊次郎坊と歳時記類にも出ているそうです。同じ例は近国に多く、

ジロウタロウ

志摩磯郡

ジロヤサブロウ

伊勢相可おうか

ジロウタロウ

美濃恵那郡えな

美濃の苗木なえぎなどでは普通にはスモトリバナで、白花の堇をジロバナ、これに対して紫色

のをタロバナと呼んでいます。即ち堇に相撲を取らせる場合に、一方を次郎、他の一方を太郎と呼んでいた名残で、『狂言記』の八幡はちまんだいみよう大名などを聯れんそう想せずにはいられません。

堇をこの遊戯に使用したのは、多分はこれ等の名前よりも更に前さからでしょう。今一種の異名の、

オソメバナ

信州下水内しもみのち

オソメンバナ

越後中魚沼なかうおぬま

の如きは、今はまだ名の起りが想像しにくいが、

ジンジイバンバア

遠州竜川村

に至っては、たしかに二つの花を掛合せた痕跡があります。爺と婆とは普通には春しゅんらん蘭

の花を採ってそう呼びました。元は粗野なる歌があつたに相違ありません。甲州の逸見^{へみ}では、蝸^{かぎゅう}牛をもジツトーバツトーと呼んでいます。

最後に今一つ、熊本県の人吉^{ひとよし}附近で、莖をセセンブキブキというのにも歌に依^よつた名でした。その意味ははつきりしませんが、角力とは関係なく、二つの馬を闘わしめたのではなからうかと思っています。この唄の文句を記憶する方の教示を受けたいのです。

草の名と子供

緒言

小さな自然に名を与える事業には、児童が誰よりも多くの興味を以て働いている。その言葉が成人にも承認せられて永く行われ、一方にはまた同じ子供のような氣持を以て、新たに言い始めた物の名も多かつたことは、方言を集めていると容易に心づくはずである。この頃外国から持込んだ色々の新語と並べて見て、殆ど兩極端と言つてもよい態度のちがいは、やがてまた近世の國語の歴史の、看過すべからざる変革を暗示するものかと思う。私が目下分類に着手している『児童語彙』には、明白に児童しか使わぬというものだけを載せることにしているから、十分な証明をすることが出来ない。それで別に全体にわたつて物の名の話をして見ようと思う。寒中に草の話をするのも時を得ないが、なるだけ因縁

のあるように第一には「雪の下」、次には卯の年だから兎の何々という類の草の名を問題にする。そうして徐ろに春の我々に来るのを待とうと思う。

雪の下

私たちの在所では、よくこの草の葉を揚げものにして食べた。子供の頃の事を思うと、先ず最初に眼に浮ぶ冬の草である。寒い盛りにも紅味を帯びた緑の葉が見られて、「雪の下」という名も似つかわしいようだが、雪に覆われたところを見た記憶はない。東京へ来てからは庭にも植えて見たが、通例は石がけ、殊に井戸の内側などの清いところに、自然に成長して春早く花が咲くので、花の形は白い小さな蝶の羽に似てずっと長めであった。雪の下という名も知ってはいたが、子供や女は皆ユツグサといていた。ユツは播州などでは井戸のことである。他ではまだ同じ名は耳にしないが、紀州の有田郡、飛騨の高山や船津、東北では伊達郡の掛田などでこれをイドグサと呼んでいる。富山県の射水郡ではイケバタまたはイケノハタという。このイケも池ではなく、あの辺の方言で井戸のことである。大阪府の泉北地方でイトバスというのも、多分は井戸かと思うが、バスの方は

明かでない。岩手県の九戸郡ではエシガラミ、即ち石にからんで生える草の意であろう。
「雪の下」の漢名は虎耳草こじそうだという。なるほど毛がはえて紫がかった形が獣の耳を思わせるが、虎にしては少し小さ過ぎる。越後でこれをヒゲジサという郡もある。全体に剃りおくれた鬚ひげほどの毛があるのでそういったという。子供の疳かんの薬、また心臓の病にもきくといっている。宇都宮附近ではミミダレグサ、磐城相馬郡ではカンカチグサという。カンカチはこの辺では火傷やけどのことで、それに附けると治る故にそういった。耳だれも恐らく同じ理由であろうが、どうしてそのような試みをしたかというと、やはり葉の形が耳に似ているからの思い付きと考えられる。紀州の熊野ではカミナリグサ、あるいは弁慶草べんけいそうのことだという土地もあるが（有田）、これを栽うえて置くと雷が落ちぬといっている。雷はめつたに落ちるものでないから、この経験はそう当てにならない。『豊後方言集』にはこの地方の名称が幾つも挙げられている。その中でキジンソウというのは名の起りが最も不明だが、九州でも筑後の久留米くろめ、肥前五島の久賀島ひさかでそういい、更に東北では仙台から石の巻に及び、秋田県の横手もキンズンソウというから、もとは中央の名であったかも知れない。五島ではこの草のしぼり汁を小盃こさかずきに一杯ずつ、一日に三度飲めば熱さましになるともいっている。豊後にはまたこの草をキンギンソウという方言がある。葉に白赤の光があつ

て、めでたい草であるから金銀草といった方が、キジンソウよりは前かとも考えられる。あるいはまたユキバナという名も同じ地方にあり、また雪割り草という者があり、愛媛県の周桑郡ではユキヤケグスリともいつている。雪のまだあるうちに花が咲き出すから、雪の下と呼ぶに至ったのも理由があると言えるが、なお私などはこのユキもイケ、即ち井戸のことではなかったかと思つてゐる。これくらいの意味変化は方言には珍らしくない。そうしても一旦耳に馴れた古い語形は棄ててしまわぬのである。

兎の耳

兎という名の草は方言に幾つかある。たとえば山口県の柳井では薺をウサギグサ。これは福島県の相馬地方でも、野薺を馬の牡丹餅というから、多分は兎が悦んで食べる草という意であろう。越後の刈羽郡で車前をウサギグサというのも、やはりこの草を飼料とするからかと思う。車前は殊に小児と親しみの深い草で、この茎を引掛け合う遊びがあり、相撲取り草の名をこれに付与した地方も多く、あるいはカエルグサ・ゲエロッパともいつて、蛙をひどい目に遭わせて置いてから、この葉を掛けて置くと活きかえるなどともいつ

ていた。またこの葉をよく揉もんで糸のさきに結わえ、田の中を持ちあるいて蛙を釣る遊びなどは、あんまり面白いので親になつてからも、私はこれを試みて子どもに見せたことがある。他の草でも釣れるのかも知れぬが、我々は車前でなくてはならぬように思っていた。上手さおに竿をはねると二丈三丈の青空まで、蛙が飛び上つて遠くの田へ落ちることがある。今考えると蛙こそよい迷惑であつた。

それから今一つ、静岡県の各郡で鼠ねずみの耳、もしくは兔の耳と呼んでいる草がある。本名は母子草ははこぐさ、私の郷里などではホウコ、好い香がするから芳香であろうと、少年の頃には思っていた。漢名は鼠麴草そきくそうまたは鼠草、色も形も大きさも短い毛のある容子ようすも、鼠の耳にならば似ていると言える。従つてどうして兔の耳にたとえたかは疑問であるが、あるいはまた奈良県北部のように猫の耳と呼んでいる地方もあるのである。この草にも色々の異名があつて、我々にとつてはなつかしい記念である。これを鼠の耳というのは佐渡の国くに仲地方、他にもまだあらうと思う。阿波あわの祖谷山いやはまではホウベラ、春の七草の一つのハコベラが、この草であつたことが想像せられる。三河の宝飯郡ほいでトーゴというのだけはまだ説明が出来ぬが、千葉県印旛郡いんぱでコウジバナといっているのは、葉の色花の形が麴こうじに似ていたからで、昔の麴は今のようになくしたものではなかつたのだらうと思う。山口県の厚あ

狭郡ではハハコグサをテンジクモチ、これを餅に入れて搗いたものも天竺餅というものである。以前は餅草即ち艾以外に、この草を餅に入れるのは普通であり、またこの方が色も佳く、においも高いといったものであったが、関東の人たちはそれを知らず、西でも追々*いおい*に用いる者がなくなつた。あるいは発生がなくなつたようにいう人もあるが、私はまだ確めて見ない。四月八日のお釈迦の誕生の日に、紫雲英と薊とこの花とを以て、花御堂の屋根を葺く習わしもあつたから、天竺餅の名はそれから出たのかも知れぬ。豊前の宇佐地方ではこの草をネバリブツ、フツは餅草即ちヨモギのことだから、それに比べると粘りが多いか、または葉の表面が真綿のようなもので覆われているという意味であろう。広島県安芸郡でこの草をオトノサンヨモギ、また淡路島の一部でトノサマユムギという理由はわからぬが、これも私などの推測では、餅にはハハコグサを入れる方が古く、今の餅草に改まつたのは後のことで、それで本式の草餅を作る草の意味に、こういう名を設けたのかと思う。オトノサンは少なくとも百姓に対立した語であつた。

馬の砂糖

秋田県の北部では、杉菜を馬の砂糖という。馬が非常にうまがって食べるからの名らしく、すなわち小児等が砂糖にあり付くようになった頃の新語で、今ならば馬のキャラメルとでもいう所であろう。富士山の南麓^{なんろく}地方には、これをまたウマノゴック、あるいはウマノオコワ（馬の強飯^{こわめし}）という名もある。ゴックは御供^{ごくう}で神に供える飯、即ちまた強飯のことだという。この種の命名の動機が既に古く、いかに祝日の飯がうまかったかもこれによくわかる。この草の地方名も非常に数が多く、また大抵^{たいてい}の人は今でも忘れずにいる。奇抜な例を挙げると信州の北安曇^{きたあづみ}郡でこれを雷の臍^{へそ}、これただ一つでは何故^{なにゆえ}かを知るに苦しむが、他のと比べて見ると意味は「取りにくいもの」というにあっただけ。すなわちこれなどは一つの謎であって、童児の考案とは見られぬのである。杉菜が畠^{はたけ}に入ると農夫は皆困るのは、その根がどこまでも深くて手ではとても抜き切れぬからで、それだ地獄の鉦紐^{かねひも}（伊豆賀茂）、地獄の釣鉤^{つりかぎ}（駿河庵原^{いはら}）、地獄の鉤つるし（同志太^{しだ}）、あるいは地獄の自在鉤^{じざいかぎ}（大隅肝属^{おおすみきもつき}）などの名も各地にあって、地底の国の炉の鉤の紐などと、困りながらも農夫がしやれたのである。

スギナという名称はこの草の形からと解せられている。九州では筑後久留米、肥前の島原半島などでマツナグサ、または松菜ともいう例があり、杉または松に似た菜という意味

で、使っている人も多いのだが、それにも今一つ以前の理由があつて変遷したものとも考えられぬ事はない。たとえば淡路の浦村では杉葉でなくツギナ、磐城の相馬ではツギグサ、紀州の有田郡ではツギツギグサ、その他ツギノコ・ツンギノコなどと、呼んでいる村は関東にも多い。こういうえは誰でも心付くことであろう。この草は茎の節が柔かで、袴の所からちよつと引けば切れる。それを元の通りに袴にさし込んで、「どこ継いだ」と言つて相手の児に当てさせる遊戲は、今も東京の郊外をあるいても見られる。それ故にまた信州北部から越後頸城^{くびき}地方にかけてこれをドコドコグサといい、飛驒の高山では直接にドコドコツイダを以てこの草の名としている。仮にスギナという語が前に出来ていたにしても、子供はなおこれをツギナと呼ばずにはいられなかつたのである。

私などの幼少の頃には、この草をオスギと呼んでいた。そして野に出て土筆^{つくし}を採る際には

ホウシ誰の子 お杉の子

お杉たれの子 ホウシの子

という歌をよく唱えてあるいた。卵と鶏との譬^{たと}えにも似ているが、この奇妙な歌の心は、子供にも半分わかつておかしかつた。ホウシは即ち土筆の方言であるが、同時に男の子ま

たは老入道をもそういつていた。お杉と法師とが全く面ざしを異にして、同じ根同じ土から前後して生れて出ることが、昔の人には珍らしかったのである。露ふきの姑しゅうとめ女みようだの茗荷がの子だのという言葉は他にもあるが、杉葉もそれと同様に肥後ではツキボシノシンルイと呼び、またツクノオバと呼んでゐる処もあるのである。

土筆は東京附近ではツクシンボといつてゐる子供が多い。今の本名もツクツクシだが、このツクシにはもはや「継ぐ」という意味はなく、漚みおの標しるしのミオツクシなどと同じに、土に突立てた榜ぼう杭ぐいのことに解しているらしい。とんでもなく大小の差を無視した点から見ても、これも子供の思い付きであつたことがわかる。私たちもまた時々はツクツクボウシともいつて、ひぐらしという蟬の鳴く声までを、この植物の名のように聴いていたこともあつた。しかしホウシだのボンサンだのというのも、古くからあつた名と思われて、関西地方は一带にこれであり、彼岸坊主という言葉などは、弘く九州四国にも及び、東の方では越後などもボウズボウズまたはキキンボウといい、遠州の磐田郡ではヨロボウシともいつている。ヨロボウシは謡曲よろぼしの「弱法師」にもあるように少年のことであつた。はかまを着て出ることが、殊ことにこういう名に似つかわしく感じられたのである。

こういう色々の面白い名があるにかかわらず、児童はなお折々は古いものに飽いて、新

らしい名が出来ると思ひ込んでそれを用いようとしている。越後でも弥彦山の周囲には、土筆をヘビタバコという村があり、また狐の煙草たばこといっている村もある。これは明かに巻煙草あきこというものを、村の子供が見てから後の新語で、しかもまた古来の命名法に遵依じゆんいしたのである。肥前の島原ではキツネンフデ、土筆どひつとも筆頭菜ひつとうさいとも支那でいうから、これを筆に見立てるのは何でもないが、わざわざ狐を引合いに出すところに、日本の子供の昔からの趣味が現われている。殊におかしいのは秋田県の北部で、このツクシンボを猫ノカモコ、もしくは雁がんノカモコともカモグサともいつていることで、これもあの形をそういう人間でないもののカモに譬えたのである。この地方の人の話に、杉菜の根には鉄分が寄つて、後に小さな円筒形に朽ち残つて溝などに落ちてゐることがある。それを河辺郡ではカツパノシウンチコというそうである。シウンチは日本の古語シジなまの訛り、シジもカモも共に男の児の前のしるしのことで、そういう名をつけて笑つた子供の顔が、目に見えるような気がする。同じ地方にはまた土筆をツベノコという語もある。多分はツギノコ・ツゲノコから転じたのであろうが、ツベといい始めた動機はまた同一であつたように思う。

雀の袴

かたばみ（酸漿）を雀すずめの袴という名は、岩手秋田の二県にもまた佐渡にもあるから、新しい語ではない。もちろん農民がはくハカマの方で、この草の葉が夕方になると、たたまれ折れ重なる形が、袴に似ているからそう名づけたものと思う。近世の野良袴のらばかまは「たちつけ」などといって、はばき（脛巾）と縫い合せて隙間すきまのあかぬものが多くなったが、以前は膝ひざまでで、形が殊にかたばみの葉と似ていたのである。しかしこういう大小のかけ離れたものを、直すぐに聯想れんそうすることは成人にはちよつと出来ない。それだけでも少年少女の考案ということが察せられるのであるが、佐渡の島ではまたこの「雀の袴」のことを、チンチンモグサともいい、備前の児島郡こしまでも同じ草をチンチングサ、石見いわみの鹿足郡かのあしではカンカン草ともいつている。昔話のチンチン小袴、もしくは小児の遊び言葉に、こういう文句のあったことを記憶している人ならば、誰でもこの名を聴いて微笑することであろう。雀はこういう小さな袴を、はきそうなものだからそう呼んだのもあろうが、別にスズメという語の用いやすかつた理由もある。かたばみは支那でも酸漿さんしやうという位で、少し酸味があるので子供はよくこれを咬かんで楽しみにしていた。秋田県の鹿角地方かづのでこの草をマングシカシカと呼ぶのも、マングシは不明だがシカシカはすかな（酸模）という草の方

言だから、やはり酸いという所から付けた名である。志州の越賀^{こしか}などでもこれをシゴメ、紀州日高郡の奥ではスイモノともいつている。梅干を製するの^にこの草を使うという地方もある（『東磐井郡誌』）。島根県の一部または土佐などで、この草を鏡草またはカガミソウというのも、あるいはこの酸味を利用して、これで鏡を磨いていたのではないかと思う。そうすればこの名を付けたのは小児ではない。

この以外にまだ命名の動機^{あきら}の明かでないのは、九州阿蘇^{あそ}付近でコガネグサ、この名は大隅にもあるから弘いであろう。ツマグレ即ち鳳仙^{ほうせん}花の花びらを以て、子供が指^{あか}を紅く染めるときに、この葉を交え揉^もんで色を出すという。薩摩でガネグサというのも形^{かた}が蟹に似ているというのではなくて、むしろコガネグサの訛りかと思われる。大和の吉野郡にはダンジリ花という村がある。祭礼の曳屋^{ひきやたい}台の飾りものに、ここではかたばみの花を思わせるものがあつたのであろう。甲州の富士川流域では、この草をネコノチャと呼んでいる。どうしてそういうかは知らぬが、これなども作者は子供らしい。陸中紫波^{しわ}郡ではアケズノママ、アケズは蜻蛉^{とんぼ}のことだから、単に野外にある飯に似たものということであろう。千葉県印旛沼の附近でもトンボグサ、石川県にも元はトンボノキュウリという方言があつた（『本草啓蒙』一六）。この草の実は少しく胡瓜^{きゅうり}に似ていていたって小さい。やはり子

供らしい名の付け方である。信州の上田附近では雀の盃というのがこの草の方言であり、越後でもスズメノサンシヨウ・スズメノカンシヨウまたはスズメグサ等、雀にちな因んだ名が多い（『新潟県天産誌』）。サンシヨウは多分酸漿の字音であろう。むつかしい本名を聴いても、すぐに自分たちの面白いと思う形にかえてしまうことは、かまきり（蝟螳）を才ガミトウロウなどといった例が幾つもある。

猫の枕

うつぼぐさは花の形が、弓の鞆うつぼというものに似ているからの名というが、子供は久しく鞆などというものを見たことがないから、幾ら発音しやすくともこの語を使わず、やはり自分たちの覚えやすい新名をこしらえた。たとえば愛媛県の上かみうけな浮穴郡でネコノマクラ、長野県の埴はにしな科郡などで蛇の枕、青森県の一部でホエドノマクラというのが、共にこのうつぼ草のことである。ホエドは乞食のことで野に寝るもの、以前の田舎の枕がこの花のよう、幾らか角張って坐りをよくした長い形のものだったことが想像せられる。福島県の東白川郡ではツチンボグサ。ツチンボは藁わら細工の藁さいくを打つ木槌きづちのことで、これも幾分か

形が似ていると言われぬことはないが、こちらはあるいはうつぼぐさの訛り、もしくは誤ってそう解したものとも見られる。

狐の剃刀

東京の郊外で彼岸花、俳諧で曼珠沙華などといっている草の葉を、奈良県北部ではキツネノカミソリ、摂津の多田地方ではカミソリグサ、それからまた西へ進んで、播州でも私たちは狐の剃刀かみそりと呼んでいた。以前の児童は「さかやき」を剃そられて痛いことを覚えていたので、剃刀というものに関心があつた。それと形の似たもので、野外に多く伸びている草だから、そう名づけたのも自然である。岡山広島の二県、紀州の熊野地方でも、彼岸花を狐草または狐花といっている処は多い。単に原野の草という以上に、この植物の繁茂するのが、多くは淋さびしい気味の悪い場所であつたことも、狐という名を付けた隠れたる動機ではなかつたかと思う。島根県などの例で見ると、出雲いずもの方は一般にキツネバナといひ、石見の方では多くはエンコウバナと呼んでいる。伊予の周しゅうそ桑郡でもエンコ花という者があつて、エンコまたはエンコウはこの地方一帯に河童かっぱのことをさういう。即ち水の

ほとりの、河童でも出そうな土地に咲く花という意味である。紀州の田辺附近では、こうほね（骨蓬）のことをゴウライの花という者もあり、またこの彼岸花をゴウラバナというものもある（『和歌山県誌』）。

自分たちの郷里では、子供はこの植物について三つの名を知っていた。その一つは前に挙げた狐の剃刀で、これは専ら^{もっぱ}その葉をさしていい、次にはジュズバナ、今一つはテクサレであるが、この事は後でいっしょにいう。ジュズ花というのはこの花の茎を折って、珠^じ数の形に真似^{まね}て首に掛けて遊ぶからで、播磨^{はりま}一国だけでなく三河の宝飯郡・石見の邑智郡^{おわち}等にも同じ語がある。

九州では大分市の附近などでオリカケバナ、やはりこの草の花茎を細かく折って、珠数にして首に掛けるのでこの名があるという。熊本県の南部でケサカケ、嶺^{こえ}を越えて宮崎県の西隅でもケサバナというのは、やはり同じように折って首に掛ける風があつたからと思う。こういう不吉な名が出来たのにも理由があつたらしいことは、隠岐島^{おきのしま}の一部または瀬戸内海の島で、この草をソウレバナというのを見ても察せられる。

関東でも群馬その他の地方でジャランボングサといい、ジャランボンは即ち葬式のこと、墓地の近くにこの花が多いことから出た名だといっている。日向^{ひやうが}も都^{みやこのじやう}城^{じやう}の辺

ではジゴクバナ、壹岐^{いぎ}の島ではゴシヨウバナ、後生というのも墓地のことをいうらしい。遠州北部の山村でワスレバナ、信州佐久地方にはワスレグサという名もあるが、これなども本来は墓の上に生ずる草という意味であつたらしい。埼玉県の東部で幽霊花またはシンダモンバナ（『^{さつて}幸手方言誌』）。徳島県の方にもユウレングサまたはチャンチャンボなどという異名もある。あるいはこの地方から高知県へかけて、シレイまたはシレイグサというのも、死霊草の音のようにいう説もあるが（『土佐の方言』）、これだけはそうでないと思う。阿波でも吉野川の上流ではシロイ、隠岐の島にもまたシロエの名があり、対馬^{つしま}でもこの草の葉をオシロイグサというを見れば、シレイは必ずしも元の音とも言えない。名の起りはむしろスミラ（つるぼ、綿棗^{めんそうじ}児）と関係がありそうである。スミラは土地によつてまたスブラともいい、花はちがうが根の形が似ている。または何々スブラという名が、元は狐の剃刀の方にもあつたのであろう。

播州も西の境では、この草をシビト花ともいうが、またシブラ・シビレ・シブライなどとも呼んでいる。この植物の汁液が唇などに附くと刺戟^{しげき}するので、この語を痺^{しび}れの意味に解したのであろう。

大和の竹之内村などではテクサリまたはシタコジキ、富士山南麓地方は一般にハコボレ

グサといい、子供はこの草を口に入れると歯が抜けるなどと嚇おどされており、あるいはまたハツカケバナ・ハツカケバアサンともいう者もある。信州の南部でも歯抜けばばアといい、この花を折っただけでも歯が抜けると信じられていた。九州も大分県の南海部郡みなみあまべではハカゲバナ・ハモギ・ハンモゲ・歯抜けいばら等の異名がある。いずれも小児を警戒するためらしいから、作者は成人であつたことがほぼわかる。

テクサリという語の方は、あるいは子供の実験だったかも知れぬが、私たちは手が腐るなどといいながらも、いつも折って遊んでいた。テクサリという名は私の郷里だけでなく、近畿では処々に行われているようだが、伊予の大三島おおみしまなどではこれをテハレグサ、紀州の尾鷲おわせではヒゼンバナといっている。ヒゼンはいやな皮膚病の名で、実際この液がつくと指の股またが白くなる。

四国では伊予から土佐の西岸にかけて、ホゼバナという名がある。ホゼルはかぶれることで、現にまたカブレ花という土地もある。紀州の西部でこれをドクホウジまたはニガイホウジというのも、ホゼと一つの語だったらしいが、今ではその意味を忘れている処も多く、鳳仙花ほうせんかと混じてホセンコなどという例もある。

石見の津和野つわの附近ではヤクビヨウバナまたはドクバナ、あるいはニユウドウバナという

村もある。ニユウドウは癩病のことで、よくよく悪い名をつけて子供を遠ざけようとした形跡がここにも見られる。

しかしこの花の見た目に美しいことは忘れることが出来ない故に、単にそういう感じから付けた名も、また方々で拾うことが出来る。意味の取りにくいものが他にも幾つかあるが、それだけは除いて置いて、豊後の東国ひがしくにさき東郡でイカリ花というなどは、大分古くからあるが面白いと思う。実際花卉のそりかえった様子が少しばかり船いかりの碇と似ている。石見の大森でチンチンドウ口というのは、河内の南の方でオミコシというのと共に、そのこの祭礼の飾りものと似ていたからであろう。

香川県のある島で、デベソてべそというのは出臍でへそのことらしく、またその近くでネコグルマというのにも興味がある。猫車は近世支那から輸入した一輪車のことと、どんな幅の狭い田中の路でもあるから便利なものだが、我々はそのきいきいと細く軋きしる音を形容して、こんな変った名を付けていたのである。それを更に同じ田畠の間に咲く車形の花に、転用したのは快活な態度であつたが、これも恐らくは何か人間以外のものの名を冠する風習が、隠れて下に働いていたのであろう。狐がそういう中でも最も数多く、引合いに出されることは前に述べた。福井地方にはまたキツネノタイマツという名も元はあつた。今でも覚え

ている子供はあるかどうか知らぬが、これなどは殊ことに美しくまた鮮あざやかな空想であつた。彼岸花の真赤に咲き連なる光景は、そういわれて見るとなるほど炬たいまつ火行列を思わせる。あるいはまた狐の扇とも狐の嫁ごとという方言があつたということだが（『本草啓蒙』九）、この「嫁ご」もやはり嫁入の行列からであろう。野原に火の光のつづくのを、狐の嫁入のようだということは今でもいつている。

ペンペン草

子供が古い名に飽きやすいこと、または誰よりも鋭敏に新しい名の面白さに共鳴することが、物の名の盛んに変化し、また地方的に区まちまち々になる昔からの原因だつたようである。それだからそのただ一つを正しい名とし、他をまちがいとすることはいいよ道理がないと、私などは思っているのである。薺なずなのたけたのをペンペン草ということは、東京の人たちもよく知っているが、何故なにゆえにそういつたのかは、もうそろそろと忘れかけているらしい。ペンペンは三味線しゃみせんのことで、最初はあるの音によって小児がつけた名であろうが、後には親兄弟でも、市中の人たちはこの語を使っていた。三味線とは言つても、実は

この草の三角形をした種実が、この楽器を弾く撥はらのかっこうに似ていたからの名である。以前の三味線の撥は琵琶びわのそのように、今少し中がくびれて先が開いていたのではないかと思う。熊本県の玉名郡たまなではこの草をネコンピンとっている。実の形が三味線の撥に似ているので、小児はこれを探って左の手の母指おやゆびの爪に当てて、三味線を弾くといつて戯れ遊んだ。山口県の厚狭郡あさでは「猫の三味線」と呼び（『防長史学』四卷二号）、愛媛県の周桑郡でもシャミセン草、またはチロリンといっている。中央部殊に京阪などには今もうこの名はないが、遠く東北の端に行つて、岩手県の九戸郡くのへではサミセングサ、秋田県にも同じ名があり、またシャミセンコという村もある。北秋田郡では「狐のシャミセンコ」ともいつている。三味線は江戸期の初めには、まだ関東の人は名を知らなかったという話が、『醒睡笑せいすいしょう』という書にも見えている。それがもうこのような端々の土地にしか残っていないのは、草の名の進化の速度がどんなに早かつたかということを考えさせるのである。

無論新旧色々の名の流布も、土地によつて状況が一樣でなく、あるいは入り交りあるいは再び古いものが復活し、また二つ以上を抱えて楽しんでいたこともあつたろうが、大体に都府の近くにあるものを、新らしい流行と見てよかろうと思う。『物類称呼ぶつるいしやうこ』は百

七八十年前の採集であるが、その中には薺を尾張あたりで爺の巾着きんちゃく婆の巾着きんちゃくといい、奥州津軽では雀のダラコというと出ており、前の方は知らず、ダラコの方は今でもその通りである。巾着もダラコも同じもので、巾着の形は近い頃まで、口を括くくれば薺の実のように三角になるものが、子供や年寄に愛好せられていたのである。その小さなダラコには錢を入れて下げてあるくのが、彼等には大きな印象であった。今の青森県の人たちは、ダラコという英語を早く知っていた証拠ドルにこれをしたがるが、気の毒ながらあの地方のダラコの中に入っていたのは、弗貨ドルどころか穴のあいた小錢がせいぜいであった。それで現在はその地だけは銅貨をダラなどといっているが、この通り古い時代から既に巾着はダラであったので、それは革で作ったのを胴乱どうらんなどというのと同じ心持から、元はだらりと垂れるからの名だったろうと思う。雀の子が持つダラならば、薺の実ほどの大きさでちょうどよいと見たのである。

それから今一つ、これはもう少し古いかと思う名がある。越後は『新潟県天産誌』を見ると、土地によつて薺に色々の名があつて、その中にはダラまたは巾着というのはまだ見当らない。最も多いのは三味線花、またはペンペン草というので、次にはまた軍配草というのもある。これは他の地方にあるか否かを知らぬが、やはり実の形を軍配という扇に見

立てたのであろう。その次にはガラガラグサ、また鈴草というのがある。ガラガラは信州長野の附近でもそういい、また他では実の形のこれと似た植物の名になった例もある。たとえば「たけに草」などもその一つで、一本の茎から幾つも下っている形を、鈴のようだと思つてそう名づけたのである。この形の鈴は三番叟さんばそうの舞ぐらいにしか今はもう見られないが、備前の邑久郡おくでもこの草をコンガラ様の鈴と呼んでいる（『中国民俗研究』二号）。コンガラ様はこの地方でしか名を聞かぬ一種の巫女ふじよで、祈祷きとうのために舞う者であつたが、今はもう絶えているらしい。これが薺の花茎のような鈴を振つていたことは、たつた一つの草の名によつてわかる。コンガラというのも、恐らくはその鈴の音に基づいた言葉であろう。

絵具花

自分などは子供の時に、鴨跖草つぎくさ即ち「つゆくさ」を、螢草ほたるぐさともギイスグサとも呼んでいた。ギイスはきりぎりす、蠡斯ぎす、はた織虫のことであり、螢草の名は東京でも知られている。この二種の虫を籠かごに入れて飼つて置くのに、何か青いものを添えて蔭と涼しさを

供与する料に、特にこの草を選んだので、自分等は虫がこの草を食べるものと心得ていた。信州や越後でこれをトンボグサというのは、花の形が蜻蛉とんぼに似ているからだとの説もあるが（『高志路一卷一〇号』）、そう似ているとも我々には思えない。あるいはこれもまた蜻蛉のまくさとして、籠の中に入れたからの名かも知れない。佐渡には七八つもこの草の異名があるが、その一つにダンブリバナがあり、秋田県でもダンブリ花、またドブリ草ダンブリ草の名もあつて、そのダンブリ・ドブリは蜻蛉のことである。あるいはダンブリに食わせる草だからともいつている。壱岐いぎでこの草をチンチロ花、鹿児島でチンチロリングサ、信州の上伊那かみいなでもチンチロ花というのは、やはり松虫の籠の草だったからかも知れない。

しかし命名の動機は案外な所にあるものもある。子供の心になって見ないと確かなこととは言えない。そのうちで大よそ判るわかのは、佐賀県藤津郡ふじつでトテツポツポという名などで、ちよつと鳩のことも聴きこえるが、伊予の周桑地方でケケコウロウともいい、この方は一名ニワトリ草ともいうから、実は花の形が横から見た雞にわとりに似ているのでそういったのである。佐渡ではまたトツトバナ、信州でも伊那では鴨跖草がトテツコ花であり、またオンドリ花ともいうが、筑摩郡ちくまへ行くと萱草わすれぐさがトテツコウまたはトテコツコである。こ

の方は花よりも葉が雞に似ているかららしいが、越後の出雲崎いずもぎきではふじ豆、即ち上方かみがたでかき豆という豆がトテコウロウで、これは鷄頭けいとうという花の小片を莢さやの割れ目に挟み楊枝ようじを足にして、實際に雞をこしらえて玩具にしている処もあつて、それほどにもよく似ているのだから、こう名づけるのも自然であるが、つゆ草の方に至つてはよほどまた子供の空想が加わっている。

和歌山県の東牟婁郡ひがしむろでつゆ草をヒカリというのは判らない。佐渡の二宮村にこうにはメグスリ花という名もあるから、何かもう忘れてしまった言い伝えがあるのであろう。駿河の志太郡だなどはこの草の花と、蠅はえの頭とを女の乳ですりまぜて、赤く色つけたものを目薬として使うという。しかも草の名の方はここでハナガラといっている。それから同じく佐渡の一部にカタグロ、もしくはジンジクロという名もあるが、これもまた不明である。四国の方では讃岐ではカマグサ、何だか葉の形が鎌に似ているからのような気もするが、これは甚だ確はなはかでない。伊予の方に行くと雀草、また卵草の名がある。これはあるいはこの草の実が小さいけれども鳥の卵と似ているからであらう。卵草と名づけられた草は他にも色々ある。従つてこの名はあまり弘くは行われていない。豊後の大野郡では鴨跖草まんじゆを鰻せ頭うづぐさ、伊予の周桑郡でも、卵草と併存してまた柴餅草という名がある。柴餅は五月節

供の日に作る餅で、いわゆる亀の子ばらなどの葉に包んだ餡入の餅であるが、これなどはたしかによく熟した露草の実が、葉苞に包まれた形と似ている。ハナガラという名の起りもわからぬが分布は広い。右に挙げた静岡県中部以外に、木曾でも伊勢でも遠く離れた山口大分の二県でも、露草をハナガラといい、東北は仙台以北、登米地方にかけて同じものをネコノハナガラと呼んでいる。ハナガラはあるいは飼牛の鼻に通す「鼻づら」または「鼻ぐり」というもののことでないかと思うが、この花の形がそれに似ているということ はちよつと言えない。とにかくに少し変った形はしている。それで津軽の方へ行くと、これをまたネコノベベともいうのである。

帽子花という名は名古屋あたりに古くあり、今でも信州の南部には残っている。巾着花という名もこの地方にはある。それよりも一段奇抜なのは、名古屋と富山県の一部とで、露草をコウヤノオカタといっていることである。オカタは人の家の主婦のことで古い語である。紺屋の細君だからあのような好い色に、自由に染めて着られるという意味で、つまりこの花の色彩のすぐれて鮮かに美しいことをめだ言葉だから、これだけは小児のウィットには少しばかり荷が勝っている。近世染物の技術と材料が新たに普及した際に、最初に流行したのがこのコバルト系の色であったことは、記録や民謡に段々の証拠がある。あ

るいは日本人のもとから大好きで、しかも力の及ばなかった色だったかとも思う。長門ながとの豊浦郡でつゆ草をハナガラまたはハナダ、豊後でもハナガラまたはアイクサ、信州の下伊那地方でもこれをエノグバナ、またはソメグサとも呼んでいる。歌にも詠まれたこの草の古い名にツキグサがある。字では月草とも書いて露草の露と対照させているが、事實は衣すりつに摺すりつ附けることが出来るから附き草で、それ故にまたウツシグサとも呼ばれていたのである。今でも女の児がこの花の色を。紙に取つて楽しむ遊びがある。すなわちつき草は特に附きやすい花だったのである。稚わない人たちの新しい名を好む癖は、この方面にも明あきかに現われている。例えば秋田市の附近から角かくの館だての辺へかけてダンブリ花またインキグサという名が既に行われている。この語がインキの田舎に入つた時より、前からのものではないことは誰でも認めるだろうが、あるいは同じ科の中の「むらさきつゆくさ」がインキ花だという土地も北信などにはある。花の汁が紫インキのようだからというが（更さら級しな）、この新らしい外国産の草を、紙に染める遊戯があるか否かを私はまだ確たしかめていない。

ハゴジャ

東京では「猫じやらし」といつているえのころ草を、越後の西頸城郡にしくびぎではネコソバエ、三河の東加茂郡ひがしかもでも同様に猫そばえといっている。ソバエルは猫でも子供でもふざけることで、この草の穂を取って板の間などでまわすと。猫が興味をもってじやれつくからこの名が出来たのである。えのころ草の名も狗いぬの子だからこれに近いように思われるが、こちらは戯れ遊ぶこととは関係なく、単にむくむくとした毛の感じが、子犬を聯想れんそうさせるからそういったもので、泉州でイヌグサというのも同じに、むしろ漢名の狗尾草くびそうという方に命名の動機が一致している。子供の考案に成った地方名が、この草にも幾つかある。信州小県郡ちいさがたではコロコログサ、九州の方にも肥前のイヌコロコロなどがあって、えのころ草という名のこれと同列のものであったことを思わしめる。コロコロは本来狗を喚よぶ言葉で、多分は「来よ」という語の改造であった。関東地方を始めとして、今でも雞にわとりを喚ぶのにコロコロという処は多い。そうして雞は瘦やせぎすであり、また引締まっているのだから、ころころしているからエノコロだと思うのは当たらない。小児はいつでも人の喚ぶ言葉を聴いて、それを相手の名前だと思ふ傾きがあるから、すなわちこれもまた元は「犬来よ」であつたことを察し得るのである。中国地方におけるえのころ草の方言を見ると、備前ではトートコ、備中はトートーボ、備後ではトートーグサ、周防すおうにはまたトトコグサ、その他

これに近い語が僅わずかずつの変化を以て行われ、そのトトコ等は、すべて皆小狗こいぬのことである。一方にはまた我々のいう猫ねこ柳やなぎ、春さき銀色の柔やわかな毛で蔽おおわれた若芽をつけて、それがまたやや猫か犬かの形に似ているものも、山陰その他のかなり弘い地域にわたって、これをトウトという者があり、あるいはまたカワラノコチコチなどという地方もある。名は殆ほとんど同じでも形はさほどえのころ草と似ていないが、これを小犬といっただけが両方に共通なのである。犬をトウトというわけはコロコロも同じだろうと私は思っている。雞を喚ぶ声にもトウトウというのを見てもわかるように、これは疾とく疾くとの音便であつたのである。人に対しても「朝はどうから」とか、「とう行つてとう来い」とか、以前は疾うと柔らげて使うことが多かった。三つ四つの幼児をつれた親たちが、小犬にとうとうというのは自然なことで、それを聴いている者が彼はトウトと呼ばれるものと、解したのもまた異とするに足らず、トートコのコなども「来い」であつたと思う。雞はトリだからトトというのだと心得ていると、魚の煮たのをやはりトトというのである。これなどは早く下さいを小児がとうとうといったからで、魚の名の片言と見ることは出来ない。それから段々と明あきらかになつて来ることは、青森県の五戸ごのへ附近では、えのころ草の名がハゴジャであつて、次のような盆踊歌がかつては行われていた。

ことし始めて粟^{あわ}の草取ったけや

粟とハゴジャのわけ知らの（ぬ）

このハゴジャも中国のとうとうと同様に、「早うごじやれ」を粗末にいった語で、すなわちこの地方では今はとにかく、前にはえのころをハゴジャと喚んでいたもので、それがこの粟とよく似た草の名にもなったのかも知れない。ハグサという標準語は合理化とも考えられるが、この盆踊唄は無論恋の歌であり、これを歌ったのは少女よりも男たちだったかも知れぬが、とにかく彼等は忠実に小児の発明した適切なる草の名を、大人になってからまで守っていたのである。

山の筆

常陸^{ひたち}の筑波^{つくば}山下^{さん}では、白頭翁^{はくとうおう}即ち「おきなぐさ」を、男の児はヤマノフデといっていることが、横瀬^{よこせ}夜雨^{やう}君の随筆にも見えているが、新作であろうと思う。この草の花穂に水を含ませると、板塀などへ字が書けるというのは、無論小学校が出来てからの経験にちがいないからである。

それ以前の子供の遊びは、この花の長く垂れたしべを髪に結び、またはその形のままを髪もてあその垂れた人に見立てて遊ぶことであつた。

多くの地方名はこれから出ている。大体に色が灰白なので老人に見立てたものと、長くつやつやとしているので少年に擬した名と二通りあり、なお『本草啓蒙』や、『増補俚言しゅうらん集覽』によれば舞を舞う人の姿にたとえたものも元は多かった。たとえば、飛驒でモノグルイ、備中でもキツネコンコン、加賀・越中でオニゴロというのもこれであり、筑前その他でゼカイソウといったのは、疑いもなく能の是界坊ぜがいぼうから出ている。

富山の近傍でチゴノマイ、または訛なまつてチグルマイなどというのも、かつてそういう舞を、面白く見た者の聯想であらう。

信州の犀川さい水域では、今でも一般に白頭翁をチゴチゴと呼んでいるが、果してチゴが童児であることを、意識しているか否かは疑わしい。下水内郡しもみのちではこれを誤つて、チンコ口花という処もあるのである。この名称の領分はもとは弘かったようである。たとえば水戸ではオチゴ花、下野しもつけではチチコまたはカワラチゴ、仙台でもチチンコといつていたというが、今ではもう行われておらぬかも知れない。九州の方では薩摩でウネコ、豊後でオネゴ、肥後にはオナイコの名があつて明かに「うない子あきち」であるが、これもその意味が既

に不明になって、福岡県などではネコバナ・ネコグサなどと猫だと思っている者も多くなっている。ちごが頭髮を「うない」にしていた時代は過ぎて年久しく、またそういう語も用いられなくなっている。カブロという語はこれに代って現われ、髪を切って頸くびのところまで垂れたものが皆カブロであったのが、後にはこれもある種類の童女だけの名になってしまい、普通の子供にはオカツパといい、またカンバともガンボウジともいうようになって。翁草をカブロという処が、伊賀にも木曾にもあつたと『啓蒙』には見えているが、現在もそうであるか否かを知らない。諏訪郡すわの一部豊平村とよひらなどでは、オツカブロウノチンゴンバという長い名で呼んでいるというが、チンゴンバは即ちチゴ花だから、これにまたオツカブロの語を添える必要は実はなかつたのである。ガンボウジというのは、この地方では蒲公英たんぽぽの花の白くなったもののもので、同時に人の頭の散らし髪のことでもあるが、群馬県の方へ行くと、これがまた翁草の名として用いられているという。髪に見立てた動機は皆一つでも、古い命名の趣意が不明になると、やはり新らしいものを以てこれに置き換えようとするのである。

東北にも白頭翁の地方名は数多く出来ているが、ここでは奇妙にチゴ・ウナイゴにたてたものがなく、全体に老人殊ことに老女に見立てた名が多い。旧南部領なんぶにはウバガシラとウ

バシラガというのと二つあつて、姥^{うば}白髪^{しらが}の方が印象は深いが、私は姥^{うば}頭^{かしら}の方が舞の姿から出た名で、一つ古いもののように思っている。

『秋田植物方言』によれば、この地方にはまたウバケヤケヤ、もしくはただケヤケヤといっている村が多い。この草の葉に触れると痒^{かゆ}くなるので、あるいはママコノシリヌグイともガモコワシという名があるから、ケヤケヤもまた痒い痒いの意だという人もあるが、この説はまだ十分に安全でない。あるいは何か今一つ古い名があつて、それがこういう形で残っているのかも知れぬと思う。

青森県にも土地によつてツブツケとかヤツレグサとか、なお二三の別系統の名が採集せられているが、大体に東北では老人に見立てたものが多く、チゴバナ・ウナイコという類の名が殆^{ほとん}ど行われていないのは、何か理由のあることのようなのである。あるいは児童の髪を切つて垂らす風習が、この地方にはなかったのではないか。

そんなら婆さんのこんな頭をしたのが、特に奥羽の端々に多かったかというところ、これはそうではなくしてむしろ姥頭^{うばがしら}というような姿で舞う舞に、印象の深いものがあつたためかと想像している。そういう舞がもうなくなつて、姥という名ばかりが記憶せられると、後には福島県の各地のように、カワババだの川原の伯母さんだのという名が、改めてまた考

案せられるのであろう。

これとよく似た命名は支那で白頭翁、日本でも翁草などと、何人にも合点が行くから以前はあつたかも知れぬが、現在は西の方には殆ど残っていない。出雲の大原郡にはヤマシババというのがある。安芸ではジイガヒゲ、四国にはジョウドノという名が元はあつたというが、今はどうであるか知らない。ジョウというのも老翁のことである。

しかし子供には名のおかしみよりも、遊びの楽しさの方が大きな魅力だったかと思う。

茨城県の真壁^{まかべ}地方では、女の児はこの草の花を実の入らぬ前に採って来て、毛を二つに分けてきれいに髪を結い、小さな赤い人形を着せる。それでオチゴカンバという語がなお残っている（『雪あかり』）。カンバもやはりカブロのことである。信州の北安曇^{きたあづみ}郡では種子を集め丸めて手毬^{てまり}にする。それでチゴチゴ花・オツカブリの外^{ほか}にまたテンマリバナという新しい名も出来ている（『郷土誌』巻三）。あるいはフデグサという名がここにもあるというが、ここでも多分小学校の子供が、これで板塀などに落書することが流行し出したのであろう。

爪紅草

二通りの全く反対な名の付け方が、殊に草の名については注意せられる。一方に非常に適切な、誰が聴いても笑いたくなるような名があるかと思うと、他の一方には意味もなくまちがえて使っている草の名も多い。この矛盾はまた兒童の癖であろうと思う。即ち遊戲の興味の忘れ難いものは、いかなる名であつても覚え、名前の面白さを楽しみにしているものは、その方にのみ氣を取られる。つまり淋しい昔の子供たちには、名を唱えるだけでも一つの遊戲であつたのである。今度は前の方の例を一つ挙げて置きたい。

鳳仙花^{ほうせんか}

は近世に外国から入つて來た草かと思われるのに、現在は全国裁^うえておらぬ土

地もなく、その名前がまた非常に変化している。高知県の一部でホウカンシヨ、埼玉県の

妻沼^{めぬま}

辺ではホシンカン、岩手県ではコウセンクワあるいはコセンコというのは明^{あき}かに片言

であるが、秋田県の各地でエングワンコまたはエングワ、山形県に行くと莊内^{もがみ}でも最上郡

でも、共にレングワと呼んでいるのは判^{わか}らない。遠く離れて鹿児島県の種子島^{たねがしま}に、エン

グワという名があるというのがもし事実ならば、何か今一つ輸入当時からの名があつて、

それが東北の一隅^{つたわ}には伝^{つた}っているのである。

新潟県では『中越方言集』の記載によれば、

鳳仙花をツماغレナイまたはホネノキと呼んでいる。ホネノキは骨抜き^{ほねぬき}の意というが、そ

れだけではまだ説明にならぬ。あるいはこの草の実が自然に弾^{はじ}けて、ひとりで飛んで出ることをヌゲルというのではないかと思う。四国では阿波の祖^い谷^や山でこの花をノギノギ、土佐でも東部の山村にはこの名があり、あるいはまたノギノ花ノギ流シともいつている。ノギというのは麦の芒^{のぎ}のことで、この草の実の形が麦の穂に似ているからだ、説明しているがそれも信じられない。だからまた「脱^だげる」という動詞に基づいたノギではないかとも想像するのである。

鳳仙花の実がひとりで飛んで繁殖するということは、幼ない観察者にも珍^{めづ}らしい現象であつたと思う。九州でも大分市の周囲で、この草をトビグサというのは明かにそれから出た名であり、別にまたトビシャク・トビシャ・トビシャゴなどという名称が、この県を中心に東は対岸の愛媛県、西は熊本県の西端まで流布している。天^{あま}草^{くさ}島では旧曆六月三十日の夏^な越^{こし}の行事に泳ぐ風習があるが、村によってはこの花と「かたばみ」の葉とを合せて石の上で搗^つき、その液を以て爪を染めてから海にはいり、あるいは棕^{しゅう}櫚^ろの葉に紅白のトビシャゴの花を貫いたものを、女の子などは頸^{くび}に巻いて泳ぐという。即ち河童^{かっぱ}の害を防ぐまじないに、ひとりで実を飛ばすような有力な花を利用したらしいのである。この方言は不思議に分布が広い。鹿児島ではトツシャゴまたはトツサゴ、南の境の宝島ではトビシツゴ、

沖繩県でも本島はティンシヤグ、またはチングサ、宮古島ではティンザク、八重山諸島ではキンジャク、与那国島ではキンタク、波照間島ではシンシヤクで、いずれもたつた一つだけを聴けば、飛草の変化であることはちよつと氣がつかぬが、恐らく飛ぶという特徴以外に、今も天草島などで残っているような、美しくまた印象の深いまじないの方法といつしよに、持つて渡つた名称であろうと思う。東北では羽後の角館かくのだてなどに、この草をゴシヤギトンコという名が独立してある。ゴセヤクは腹を立てること、ちよつと手を触れるとすぐに実が飛ぶのを、怒つて飛ぶ者と呼んだので、これは西国の方とは無關係に、この土地限り思い付いたものらしい。

この花の紅い汁液で爪を染める風は、支那にも夙はやくあつて長崎を経て入つて来たというのは事実であろうが、日本に弘く行われたのも、少なくともただの真似まねではなかつた。こゝうして海に入れば水の物に捉とられぬとか、または草の中をあるいても蛇に巻付かれぬとかいうことを、かつては信じて真劍に実行する者があつたので、後には再びただ少女だけの、面白がつてする遊びになつたが、最初の分布にはもつと強力な動機があつたものと思われる。この風習を元にした鳳仙花の地方名は二種あつて、その一つはツマベニ、即ち爪紅である。土佐の西半分にはこれが多く、土地によつて少しずつ変化してツマベリ・ツ

ワベニ・ツワベリ・ツバメニ・ツバベニ・ツバメリからツバメー、またスバベリとさえいう処がある。今一つの方はツماغレナイ、この方は九州の一部にも行われ、また標準語としても認められているらしいが、余り上品過ぎるためか略してツماغレ、またツماغリソウという者も多く、山口県でも東方はツماغリソウ、西部はツماغレと呼んでいるが、九州は更にその分化が弘く、豊前ではツماغロ、豊後にはまたツماغラという土地もある。佐賀県ではツバメもしくはツバネ、肥前五島などもツバネであつて、これはツマベニの方から分れたかとも見られるが、やはり中間に燕つばめをツバクロという語を置いて考えると、後の方の系統のように見られる。もつと驚く変化は、奄美大島あまみおしまの古仁屋こにやでダマクラ、名瀬なげでカマクラ、それからもう一つ變つて隣の永良部島えらぶではハマクラ、喜界島きかいではマンカとまなつてゐる。南の島々では鎌倉という語に、昔からなつかしい響ひびきがあつた。新たに海の外から入つて来た花に、もしツماغラというような音があつたら、これをカマクラの花と誤るのは自然であつた。この島の民謡として今も記憶せられているものに、次のような一首がある。

カマクラぬ花や手のさきに染めろ

親のゆしごとや胸にそめろ

即ちこの島でもまた鳳仙花は爪を染める花として、娘たちに知られていたのである。鳳仙花という名をそのままに用いている土地でも、爪を染める子供遊びはまだ多く残っているが、これが成人の化粧でもあったという痕跡はもう見出し得ない。ただ富山県中部でこの花をケイセバナ、島根県の西端でこれをビジンソウまたはミヤコワスレという名を存するを知るのみである。これ等はもちろん児童の命名でなくて、あるいはただ単に花の色のくれないが、鄙ひなに稀まれなることをめでてつけたのかも知れぬ。

柵割草

かやつり草は莎草などとも字に書いているが、どういう漢語が正しく当るかを知らない。一種なつかしい香があつてこれを折取ると子供の日の記憶がよみがえつて来る。茎が三角なので二人の児が申し合せて、前後ちがつた側面から二つに裂くと、縁が繋つながっていて四角な囲いが出る。これを彼等は蚊帳かやを吊るといったのである。ちょうど初夏の、家では蚊帳を取出す頃なので、この名が印象深くこえるのであるが、熊野ではこれをマスグサといっている。

広島県の東部でも^{ますぐさ}柵草、播州にはまた^{ますわり}柵割という名があり、山口県の瀬戸沿海でも柵割草といっている。割って柵の形になる草という意味で、柵が農家の児には親しみの多い器物であつた以外に、我々にはなお二つのことが考えられる。一つは以前の大柵には対角に棒を張つたものが多くて、これが蚊帳よりも一段とこの草の割れ方に似ていたことである。今一つの事実は多くの子供は蚊帳を知らなかった。蚊をよける手段には蚊遣^{かやりび}火は記録にも見えるが、蚊帳の今の形になつて常民の家にも普及したのは、存外に近頃のことだつたのである。

草の名としてはカヤツリグサの方が響きはよいが、物を知らなければ聴いても興味が少ない。しかも一部の児童はまだ蚊帳の中に寝ない時代から、既にこの語を覚えていたらしいのである。

国語の流伝にはもうよほど古くから二通りの様式があつた。即ち体験をした言葉と、暗記をしなければならぬ言葉とで、今日の小学生等は原則としてその暗記の方を強いられるのである。言葉の意味が何の説明もなくて自然にわかる時代には、子供と国語とは今少し縁が深く、新しい物の名はこうして草^{そう}莽^{もう}の間から生れていたのである。

目はりごんぼ

名を付けるということそれ自身があるいは昔の子供の遊びのうちであつたので、このように覚え切れないほどの新らしい名が、次から次へと出来たのではないかと思う。私などの郷里では畠に夏生える草の「すべりひゆ」を蛸たこぐさ草またはタコといつていた。これはあの草の茎の色とつやが、いかにもゆで章魚だことよく似ているから誰にでも附けられる名だと自分なども思つていた。多分友だちの一人がそういう出したのだろう位に考えていた。後に大阪府でも奈良県でも、同じ言葉があることを聴いて、むしろ遠方の一致を珍らしく感じたことである。下総の利根川とねべりに来て見ると、子供は皆この草をヨツパライと呼んでいた。これは抜き棄てて少しの間置くと、茎の色が著しく赤くなるからの名で、やはり遊びながらも自然に付けられるほど手軽な名だが、関東では他にもそういう土地が多いようである。一人が発明してそれが遠くへ運ばれたのではなく、そこでも別々にそう呼ばずにはいられなかったのではないかと思う。とにかくどんな子供にでも、気がつかずにはいられぬ色の変化であつた。大和はタコグサの名がよく知られているが、宇都宮などではまたこれをアカゴンボ、もしくはアコナレゴンボともいつている者がある。赤うな

れ赤うなれと唱えて待つていた児童の遊戯が想像せられる。あるいはタコというのも元はこの草の茎を水に浸^つけて、章魚をゆでるという遊びがあり、それを私たちがもう忘れているのかも知れない。

コンボは九州の北部、筑後の三池郡^{みいけ}などで、メハリコンボというのがまた「すべりひゆ」のことである。ここにも以前は赤うなれゴンボという遊びがあつたか、あるいは別にこの草をコンボという名が古くからあつたか、いずれかであればこの東西の一致はあり得ないと思う。メハリというのはこの茎を短く切つて、それを瞼^{まぶた}の上下にあてて目を張る戯れがあるからである。

私などの幼ない頃には石^{せき}菖^{しょう}という草の穂を取つて、これをつつぱりにして目を張り、よつてまたこの植物をメハジキといつていた。大分別府^{べつぷ}の近くではメツツパリとも呼んでいる。何でもないことだがこれで目^まばたきをせぬようになると、ちよつと変つた顔に見えるのを興じたのである。

コンボは小坊でこの遊びとは多分関係がなく、新旧二つの名の結合と思われる。東北は一般に、小児がだだをこねることをゴンボホルといい、あるいは酔人^{くた}が管を巻くことをもそういう処があり、後の方が古くからあつたようである。

今でも牛蒡ごぼうを掘るという感じで使われているが、事によつたらこのゴンボは酔っぱらいのことであったかも知れない。南大和のアカゴンボという名称なども、それだとその起源が大よそはわかつて来るのである。

青空文庫情報

底本：「野草雜記・野鳥雜記」岩波文庫、岩波書店

2011（平成23）年1月14日第1刷発行

底本の親本：「柳田國男全集 第十二卷」筑摩書房

1998（平成10）年

初出：野草雜記「短歌研究 第五卷第四号」改造社

1936（昭和11）年4月1日

蒲公英「いぎやう 第九卷第二、五号」御形詩社

1930（昭和5）年2月5日～5月5日

虎杖及び土筆「民族 第三卷第五号」民族発行所

1928（昭和3）年7月1日

葦の方言など「地上樂園 第二卷第七号」大地舎

1927（昭和2）年7月1日

草の名と子供「愛育 第五卷第一、五号、第十号」恩賜財団愛育会

1939（昭和14）年1月1日～5月1日、10月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「蒲公英」の初出時の表題は「野草雜記」です。

※「虎杖及び土筆」の初出時の表題は「虎杖及び土筆（方言の小研究 三）」です。

※「野草雜記・野鳥雜記」は1940（昭和15）年に甲鳥書林から柳田國男の装丁により出版されましたので、表題を「野草雜記・野鳥雜記」とし、副題を「野草雜記」としました。

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2013年5月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

野草雑記・野鳥雑記

野草雑記

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 柳田國男

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>